

第20号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十五年十一月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

眼	大西亥一郎	1
偽りの歴史書	四 早蕨 椿	12
長生きの秘訣	胃弱亭 骨人	25
人間ドック	小野村 新	28
祈り 魅華		35
ビューティフル・ドリーマー	高阪博一	41
「俳句」秋桜	彩 華	55
アクトス写真館		56
シヨートシヨート	二編 高阪博一・大西亥一郎	57
20号に辿り着きました	大西亥一郎	59
総目次 (10号から20号まで)		63
編集室から		70

眼

大西亥一郎

オレは右目が霞んで見えにくくなつたので、市内の総合病院に出かけた。著名な眼科があった。

「黄斑上膜です」

若い医者はそう言つて、もう少し進行したら手術ですという。

やれやれ、嫌だなと思つたが仕方がない。診察室から混雑する待合室に出てきたら、山下猛と目が合った。慌てて知らん振りをした。もう二十数年ほども前になるから向こうは覚えていないはずはない。大きな小学校で職員は四十名あまりもいた。山下猛は教頭だから三年程しかいなかったし、毎年人事異動は数名あるから、覚えていないはずはないのだ。

椅子に座つてしばらく目をつむつていた。隣に座つた婦人の香水の匂いが鼻をつく。

ほのかに薰るくらいだといいいのだが、鼻から

滲入して、口中にまで広がる。舌の上にざらりとした香りが広がる。身体中に絡みつきそう、心まで紫色に染まりそうだ。

しばらく我慢して目を閉じていた。顔を合わすより匂いの我慢の方がいい。

もういいだろうと、何も気づかないふりで目を開けて辺りを見回すようにした。また瞬間目が合った。ほんの四、五メートル向こうの壁際の椅子から、ニヤリとしてやがる。嫌な男だ。あくまで知らない振り、また頭を下げた。

山下猛と目が合ったことも心を重くしたが、隣の婦人が男性と気がついたことも驚きだった。多分四十年配であろう。薄手のブレザーをこざつぱりと着こなしていた。化粧の濃い、それでも女盛りの女性を期待していたので、香水の匂いが、安物のヘアートニックに変つたような気がした。まあ、スケベ心の罰だろう。改めて我慢しながら空気を吸い込んで、勢いよく吐き出した。山下猛の残像も振り払うつもりだったが、そちらはしつこく目の裏

に残った。

オレが美都路市の赤石小へ異動で移った時が三十八歳だった。その時に奴は教頭になって二年目とか言っていた。五十過ぎだったろう。もう今は、多分八十前後になるはずだ。別に特に親しくはなかつたが、嫌な野郎という印象だけが残っていた。

しかしまあ、百名程の患者が押し合いへしあいするこの待合で、偶然にしろよく目が合ったものだ。あの瓜実型のニヤリ顔は、オレを確かに認識している。しかしオレは認めたくない。奴との思い出というところある。

一つは、奴の息子が新車を買うので中古をオレに買わないかと言ったときだ。

確か十年程も乗った千五百CCの国産車を高い値段で売りつけようとしやがった。「丁寧に乗っているしね。事故もないし」ということだった。それにしても中古市場より高かった。やはりニヤニヤしながら貧相な身体を近づけてきた。

「あ、いや、結構です」と言つたのを覚え

ている。まあ誰彼なしにその話をしていたので、オレがターゲットというわけではない。それにしても、強面の体育専科の教師や、五十代ののしつかりした者には話をしていなかったから、なめられていたのだろう。

小学校の教師は担任が殆どで、あとは学年付の副担任がいる。大抵、専科の美術とか体育とかいう技能科の教師がなる。オレは五十四歳で教頭になるまで担任をしていた。小学校は学級王国というが、この頃は王国が児童の反乱で崩壊することも多い。幸いオレの場合はずまずの教師だったからずっと担任であつた。崩壊した担任は、翌年からは大概、低学年の担当になる。他校に回されても低学年だ。まあ、低学年こそいい迷惑だ。小さいので反抗できないし、上手く親にも伝えられない。教師が教育を上手く出来ないというのは、会社に勤めて仕事が出来ないと言うことだ。しかし誠首は出来ないのだから回しにする。出来ないときは新任教員の指導教員と

いう肩書きで現場から外す。それでも小学校が成り立つのは、物言わぬ小さな子どもたちの犠牲と、学校に任せっぱなしの保護者、まさか不適格教員が指導しているとは気がつかない新卒者、そして何より、教育を支える大多数の真面目な教員のおかげだ。

小学校の教頭、校長はなり手がなくて、最近、四十代で教頭になる者も出てきた。児童の減少は一部を除いてじわじわ進んでいる。職員が減らなかつたのは、学級定員が少なくなつたおかげだ。最近は複数担任制や専科の教員が増えている。これでも欧米の先進国に比べたら、まだ教育は軽視されている。

その職員のうち六割から七割が女性で、彼女たちは管理職になりたがらない。赤石小の場合は、四十名あまりのうち三十名近くが女性で、教頭と校長を除くと、男性は十名たらず。二十代二名、三十代四名、四十代二名、五十代二名である。五十代の教頭適齢年代が二名である。通常三年から六年教頭をして、

校長になつてまた三年から六年勤めて退職する。つまり男は全員管理職になつてもいいのだ。男の場合は世間体というのがあって、やはり最後は管理職になりたいらしい。といっても管理職になつてもならなくても給料に大差がないのが教師の世界である。「生涯現役」といつて担任をつづける人も希にはいる。希にはというのは、オレの見た限り、ほとんど人は複数担任として補助に回つたりし、担任から外れている。

まあ、五十代になつて十歳前後の子どもに纏わり付かれて情熱を持ち続けるといふのは至難の業なのだ。中学校でも同じ事らしい。ただ中学の場合は担任以外に学年担当の教員がシステムとして必要だから、そちらに回る。こういう状況で希望すれば誰でも教頭になれる。その中の一人が山下猛だ。噂では、担任時代に学級崩壊を二度ばかり起こしているという。低学年担当に回されたが、歳がいつて教頭希望をすれば、よほどのことが無い限り管理職試験は通る。

日がな一日ぶらぶらして、時々市教委へ出す報告を書いている。あとは用務員さんとかだべっている。職員室の前に出勤簿とか出張簿がある。用があつて前に来る先生をつかまえては世間話をしてニタニタしている。オレは関わりになりたくない。嫌いだ。まあ、みんな山下猛は嫌いだろう。好きな者もいるかも知れないが、この場合、みんなと言つても信用してもらえないと思う。

家は地元の農家である。半分を住宅地用に売つたというのがそれでも一町以上の田んぼと、一反の畑がある。畑は隅の方に自家消費の野菜を作っているだけであとは遊ばせている。まあ遊んでも暮らせる大金持ちである。普通、サラリーマンには兼業禁止規定というのがあるのだが、教員は、農家やお寺は兼業してかまわないことになっている。実際、機械化と農薬や肥料の進歩で、米作りにはそう手間はかからない。土日で充分間に合う。

奴は校長が留守の時は、校長室のソファに座っている。早くそうなりたいのだろうと

オレは考えていた。みんなもそう思っているのだが、奴には校長にはなつて欲しくない。組合の力が強いので教頭はヒラと同列だが、校長になると教育権があるので、ネチネチとやられ、ニタニタと話されるのは堪らない。なり手がないとは言え、よくまあこんなのを管理職にしたことである。

小学校の管理職不足で、この頃は中学校の教員が管理職として異動してくる。美都路市は郊外型の地方都市だが、田舎では、都会地の中学から天下りみたいに管理職がやつて来る。教頭は小学校の教員免許が必要なので、通信教育で免許の取れる大学にはこの手の学生が多い。校長は免許さえ要らない。民間人校長登用が流行なのは、免許不要という側面があるからでもある。

こういう事情で小学校の五十代の男性は手を上げれば管理職になれる。

管理職の給料はヒラと大差ない。その上ごたごたが多い。モンスターパーレンツなんていう保護者もいる。だが、小学校は中学校に

比べれば、暴力も喫煙もたいしたことはない。男性であればその体力だけで子どもを圧倒できる。中学のように第二反抗期、思春期という難しい大人とこどもの間「中人」ではない。

だから教頭と言つても校長を補佐して、モンスターの前面に立つ必要はない。おまけにクラブがなくて土日や夏休みに縛られることがないし、毎日、帰ろうと思えば早く学校を出ることが可能だ。そう言う意味ではオレも同様の理由で教頭になつた。

だが、山下猛は願ひ下げだ。もう一つ理由がある。

一九九三年、平成五年、夏の深刻な冷害と台風の相つぐ襲来で、大凶作となつた。全国平均の作況指数が七十四だつた。昭和に入つて以降は、敗戦の年の六十七を除き、最低である。それまでは、米は余つて困つていた。ところがこの大凶作で当時の一千万トンの需要に対して収穫量が八百万トンを下回る事態になる。前年の持ち越し在庫は二十三万ト

ンしかない。

国産米の価格は十^キ六千円程だつたが、翌年四月には九千円を超えた。パニックになると買いだめなどが起きる。米屋は売り惜しみをし値上がり待ちで隠してしまふ。三月にはスーパーや小売店からコメが消えた。

当時の細川内閣はタイ、中国、アメリカから二百六十万トン緊急輸入することにした。この輸入米の中核がタイ米である。今では海外でも日本米に近い味のものがあるが、当時は日本の短い米に対して、長粒種という長い米である。俗に外米と言われて飼料などになり余り歓迎されなかつた。パラパラとしていて、焼きめしなどには合うが、炊くと色も少し黄色く、臭いもきついと言われた。

オレの家でも困つた。食べ盛りの子どもが二人いる。オレも妻も親類に田舎がない。勿論農家にも親類はいない。またインターネットや携帯の普及は二千年頃からで、調べる手段もない。高くても買うしかないが、店に米がない。まあパンやラーメンもあるし食べ物

に不自由はないが、米がなくなつた。

山下猛が日曜日に突然家に来た。

オレは慌てた。ろくに話したこともないが、勤務先の上司の教頭である。

「教頭先生や」

慌てて妻に和室に案内させた。

挨拶の後、山下猛がニヤニヤしながらいきなり切り出した。

「米、困つとるやろ」

「あ、はあ」

オレは目を白黒した。

山下猛の家が農家で一町近い田んぼを耕しているのは聞いて知っている。一町は百メートル×百メートルである。通常の小中学校のグラウンドより遙かに広い。

「十^キでな一万円。古米やけれどな」

平然とそう言うので頭にきた。米が店にない。欲しいことは確かだ。スーパーで一万円でもいい。

だが、教頭先生が、歳下で目下のオレに対して、手に入らないから困っているだろうと

心配して、米を持ってきてくれるのである。普通ならば、「お金は要らない」と言う。オレとしては感謝して、「そういうわけにもゆかないのでいくらはお払いしたいと思います」と返答する。そこで教頭は「なるほど、ただでは君も心苦しいだろうから、古米で悪いが十^キ六千円で買ってくれるか」という話になる。ならば判る。六千円なら暴騰前の市販価格だ。

それが前段階がなくて、いきなり一万円とこのものでは、危機に便乗した坊主丸儲けのよくな値段そのものではないか。

「いや、あ、り、が、とうございますが、今、今のところは」

オレはそう言った切り口を嚙んだ。

ふざけるな、と心の中が煮立っていた。

これが二番目の理由である。

というわけで、嫌いなのだ。口は聞きたくない。第一オレのことを覚えていないと考えるのだが、どうも知っている気がする。厳密に言うと、関わりたくない理由はもう

一つある。山下猛は五十九歳まで教頭をした。噂によると校長になれない珍しい教頭の一人と言うことであつた。確かに学級崩壊を二度も起こして低学年担当という教育力のなさでは、校長として指導は出来ない。また、まことしやかに、オレの考えているのと同じ、こすつからい性格が影響していると言われている。確かに職員からも好かれていないし、部下を懐柔する動きもない。上からも好かれていない。通常、退職まで三年を切つたら昇任しないとされる。ところが一年間だが校長になつて退職した。校長になれた理由は分からない。つづける予定の校長が急に辞めて席が空いたからとも言われている。

オレが退職して美都路市の「小学校退職校長会」に行くど、上席の中央でニヤニヤしながら瓜実顔をしていた。頭の髪の毛は簾模様だが血色はいい。

「退職校長会」は大きな組織だ。毎年何名かが退職していくから、数十名になる。会費

を払つていてるだけという人も多い。だが、「退職しても校長だつた」という気分は味わえるし、一応、釣りやゴルフの会もある。総会や忘年会もある。「退職校長会」には美都路市の教育長も来られるし、行政も事務局を設けたりして応援している。会長となると名誉なことでも藍綬褒章は確実になる。でもあみんなんとなく入っている。最近では、勇気をふるつて退会する人も多くなつてきている。しかし「波風をたてるのはなあ」と言う気分が強い。オレもその一人で、最近では会費だけ払つて出席はしない。バカバカしいのでメドとして古稀を迎えたらやめようと思つている。山下猛はその会の副会長だという。まあそれがよけいにバカバカしくなつた理由かも知れない。

その山下猛が顔を上げたら向かいにいる。白内障あたりだろう。単なる結膜炎か何かかも知れない。

眼科は大きな建物の一階にあつて、入口の

受付を通ると、四角い広い空間に出る。百人は座れる椅子が真ん中と周辺に配置されている。この空間の回りに、口の字型に、眼圧や視力検査室、目薬などをさす処置室、相談室、四つの診察室が配置されている。三人は専属の医師で、後は国立大病院からの派遣医師である。四階に二つの手術室を持ち、年間の手術数では国内の十指に入る。

「幸田虎雄さん」

スピーカーから名前がもれた。

うへつと言う声の中で響いた。山下猛に念押しして、オレのことを確認させたようなものだ。虎雄という名前を聞けば思い出すに違いない。

次回の予約の順番が来たという呼び出しだ。この後、自動精算機で支払いをして、薬局に寄り病院を出ることになる。

目を合わすのは嫌だなど思いながら顔を上げると、山下猛の顔がなかった。検査にでも行ったのかも知れない。

オレはホッと息を勢いよく吐きながら、そ

の反動のようにして立ち上がった。

予約を済ませて受付前を出て、会計カウンターの前に並べてある椅子の一つに座った。ここはカウンターに向けて総ての椅子が十五脚ずつ四列に配置されている。スピーカーで呼ばれると診察カードを差し込んで精算機で支払いはする。後は目薬を貰うだけだ。視力がこれ以上悪くなると手術になる。

オレは会計カウンターの女性を見るとともに眺めている。

三十代の半ばだろうか。てきぱきとしてこやかだ。流行っている病院は、賑やかでやかましい。その代わり職員は親切で仕事熱心だ。そうでないと勤まらないだろう。この病院はたまにしか来ないが、その度に何かしら変化がある。レイアウトが変わっていたり、掲示物が変わっていたり、新しい機械が入っていたり、およそそのままと言うことがない。医療技術や情報自体も日進月歩だから、眠ったような病院は危険だ。どんな組織でもそうだが、常に新陳代謝し、改善されて、活

気がないと沈滞する。

会計を呼ばれて支払いを済ませ、葉を受け取ると病院前に出た。少し南にくだつて市バスに乗つて帰る。

歩道を歩き出して、ほんの二十メートル前を山下猛が歩いているのに気がついた。

肩の力が抜けて、首を少し右に傾けて貧弱な身体を引きずるようにだるそうに歩く。今のままでは追いつきそうだ。オレは少しスピードを落とした。奴の自宅は、この病院の西、そう遠くないところだから、五分もすれば左に折れるだろう。オレは十分かかるバス停からバスで二十分も東に向かう。

追いついて挨拶くらいするかという気持ちだが、頭の隅に蹲っている。まあ、同じ学校にいたのはもう、昔々も昔のことだし、期間も二、三年、なにより互いに歳もとつた。

陽は中天で、秋は半ば、歩くのに支障はない。オレは「退職校長会」に出ないし、四ヶ月に一度通院する眼科でそうそう顔を合わせることがないだろう。

一期一会ではないが、挨拶くらいしておいたほうが良いかとも考える。

だが足の動きはそのままだった。あくまで忘れた風にしておけばいいと思つた。別に今生の別れになつても悔いの残る相手ではない。何よりあのニヤニヤ嗤いの顔にまた出会うのは願ひ下げだった。

疲れた心と身体を引きずつて歩く山下猛を見ていて、オレはふと今まで考えたこともない思いに囚われた。

あれは自然体だろうか。何も隠さない。疲れたら疲れた風で無理をしない。

黄斑上膜で歪んで見える格子図が頭に浮かんだ。

オレの目は、現実を直視していない。歪んでいるのだ。現実の直視などあり得ないかも知れない。しかしオレの目は単純に物事を写すことさえ出来ない。自然体になろうにもなれない。ひよつとしてオレの方が何かにかまえた人生だったのかも知れない。

黄斑上膜という病気は、加齢に伴って起る特発性だが、一般的なものらしい。目玉が縮むのを加齢性変化という。目玉の真ん中は硝子体で、後ろに網膜がある。この硝子体が縮む。歳がいくと誰でもそうなるらしい。網膜には黄斑という目の中心がある。硝子体と網膜の間に膜がある。何故あるのかは不明だが、硝子体が縮むとき希に網膜にその薄い膜がちぎれてくつき、やがて網膜を歪ませる。これが黄斑上膜である。オレの場合は右目に起こった。線が歪み、風景がぼんやりする。酷くなると手術である。硝子体を除去する。そして、網膜上の膜をはぎとる。といっても、膜はものすごく薄く、網膜が共に破れる恐れもある。難しい手術である。よく聞く白内障は、硝子体の前にあるレンズ型の水晶体の白濁である。今では日帰りも出来る十分間程の手術だが、この黄斑上膜は二百人に一人は失明もあると言う。一時間以上は手術にかかり、前日と術後は入院を必要とする。

ひよつとして、オレの心は若い頃から、格好をつけ、よく見られたいというこだわりという上膜に引張られて歪んでいたのかも知れない。心の入れ物も固い上に、内側にこだわり膜が生成されて、それが歳と共に厚くなる。貧弱な知識や経験が膜を作り理性の目を曇らせる。智慧を閉じ込める。心の入れ物も老化とともに脆くなり縮み、やがてこだわり膜はますます厚くなり、そしてちぎれて砕け、心の中を漂い、濁らせ傷つけるのかも知れない。

山下猛は、古い自動車をみんなに売ろうとしたり、米がないときに高い値段で売りつけようとした。が、それはみんな、山下猛にとつては善意から出たことなのかもしれない。乗り手もはつきりし、事故を起こしたかどうかもある。中古車は安心である。具合が悪ければ売り手の山下猛が文句を言われる。勿論買い手の教師にとつては文句の言いにくい相手である。中古業者なら遠慮

は要らない。山下猛は文句の出る可能性まで思い至らなかつた程、善意で車を売ろうとしたのではないだろうか。

古米にしても、手に入らないのだから、一万円でも有り難いだろうと思つていたに違いない。相手がどう考えるかといつたことなどおかまいなしの、自己中心的な善意が溢れていたのだろう。

校長になれないといわれた男である、部下の掌握も出来ず、慕われていないどころか嫌われてもいた。しかし自分に正直に生きていたのではないか。多分、上に付け届けをするような気も回らず、ケチで、部下を飲み会に誘うという技量も智慧もない、良い意味か、或いは悪い意味かは判然としないが純朴な農民がそこにいたには間違いない。

オレの目が歪んでいた。心の眼が歪んでいた。

こだわりなく、「お久しぶりです」と声を掛けようと思う。

「山下先生」

霞んだ啞れた声が、喉の奥からフツと飛び出して、空中に消えた。

音として波を起す前に粉々に砕け散つた。

山下猛の浅黄色のシャツの背中が波打っている。オレはゴクリとつばを飲み込んだ。

一呼吸置いて、深く息を吸い込んだ。

「や、山下先生」

小さな音が飛び出た。

それは太陽に焼かれたようにじりじりとした響きを持つていた。

しかし、山下猛の背は相変わらず波打ち、右に傾けられた首は、微かにゆらゆらとしている。少し距離を詰めて叫ぶようにしないといけ

ない。

近づいて言おうと思う。

「黄斑上膜だね」と話して、「先生はどうされました」と訊ねればよい。

だが、足は速くならない。身体は動かない。冬に向かう秋の風が、心の中をざわつとかき混ぜていった。

偽りの歴史書 四

早蕨 椿

「前回までのあらすじ」

神と人の混血児である海生は「忌み子^{いご}」として高天原にある庵に監軟禁され、父である天若日子は監禁された。

その数年後、高天原に捨てられた子ども、九郎は久久能智神^{くくのちかみ}の養子となるが、自らを捨てた母親を憎み育つていく。そんな中、海生と九郎は出会い、互いに高天原や神への恨みを持つものとして交流を深める。しかし、そうした二人の出会いを危険視し、高天原は九郎を葦原の中津国へと追放する。数千年後、先代の久久能智神が亡くなり、その後継者として九郎が選ばれ高天原へ戻される。しかし、九郎は自身の意見を無視して役目を押し付け

ようとすする高天原に怒りを覚え、建御雷之男神、経津主命のところを飛び出し、海生の元へと走り去った。

九郎が走り去った後の建御雷之男神の執務室は何とも言えない空気に包まれていた。黙々と仕事をこなしている経津主命に対して、建御雷之男神は走り去った九郎の身を案じ、右往左往している。九郎が高天原を追放されたのは数千年も前であり、ましてや当時はまだ幼い子どもで、どこに何があるのかよく覚えていないであろう今、一人で行ってしまったが大丈夫なのかと、気が気ではない様子らしい。

「…はあ」

何度目になるか分からない溜息をつきながら外を眺めては視線を落としまた歩き始める。そんな行

動を繰り返す存在に苛立ちが溜まったのか経津主命が怒鳴る。

「何度目の溜息だ！ 九郎も子どもではないのだから心配する必要はないだろう！」

「そうは言っても…九郎は内裏の中もその周囲もよく知らないはず」

「だからといって、あの状態では誰の言葉も聞かない。自分で状況を受け入れるしかない」

経津主命の言葉も尤もであり、建御雷之男神は言葉を詰まらせる。

（確かにあの状態の九郎に久久能智神を継げ、高天原の生活に慣れろといった此方の都合を押し付けても反発するだけだ。ただでさえ九郎は昔から自分の意志を曲げない子どもだった。自分で認め、納得したものしか受け入れない。それならば今はわたくし達が言うよりも、九郎自身が時間をおいてでも受け入れるしかない。そうだ、九郎が納得しなければ久久能智神を継いでも意味がない。）

「弟が心配なのは分かる。けれど、もう違うんだ…九郎は弟である以前に久久能智神になる。それを忘れては駄目だ。兄としてではなく、建御雷之男神として接しなければ」

「分かっています。それでも、わたくしは九郎にとつての兄です。幼い弟を守ることが出来なかつた。そして今、またわたくしは九郎の気持ちに浴つてやる事が出来ない」

「…長過ぎたんだ。数千年の時間は九郎にとつて長過ぎた」

「どうしてわたくしはいつも…いつも…：大切な弟を助ける事が出来ない」

拳を握りしめ俯く建御雷之男神に対して、経津主命は小さくため息を吐いた。数千年前の追放処分の時、誰よりも九郎を…弟を心配し、助けようと必死になつたのは建御雷之男神だった。たつた一柱が何を言つても高天原の決定は覆らない。だからこそ、此度の九郎追放処分の取り消しに誰よ

りも喜んでいた。ようやく九郎に会えると……だが、現実には九郎に拒絶されるという結果だった。建御雷之男神にとつてそれは何よりも辛かった。

「九郎も、突然のことで混乱しているだけだ。落ち着くまで待とう。主がそんなに落ち込んで、眷属たる我も辛い。主の気持ちは我に伝わる」

「……情けないですね。眷属たる貴方に慰められるなど。何時になればわたくしは先代のように振る舞えるのやら。先代を知る貴方に見れば、わたくしは未熟者でしょう」

「我は眷属たる役目を果たすだけだ」

「貴方がそれだけ頼もしいから、わたくしはつい甘えきつてしまう。この高天原で何柱がしているのでしょうかね。神位ある貴方が私の眷属など……」

「知る者のみ知つていければいい。仕事をすらすら、建御雷之男神」

庵の中に入った九郎と海生は互いに向かい合つて座つていた。海生は取り敢えず言葉通りに茶を淹れただけで見守つている。九郎の鳴咽だけが響く庵の中で海生はどうしたらいいものかをずつと考へていた。

互いに沈黙した時間が過ぎていく中、暫くして九郎の鳴咽が止み、目元をこすつているのか衣擦れの音がした。海生は今まで見ないようになげつていた視線を少し上げると、息を吐いて落ち着いた九郎の姿があつた。九郎はゆつくりと正面を向き、海生と目が合うと声をかけた。

「……海生殿」

「ん？」

「取り乱してしまい、すみませんでした」

目元はまだ赤く腫れていたが、それでもまどう空気は落ち着きを取り戻していた。その様子に海

生はホツと息を吐いて、ようやく安堵の笑みを浮かべた。

「いや、気にすることじゃない。落ち着けたのならそれでいい」

「久々の再会だというのに驚かせてしまいました。お恥ずかしい限りです」

九郎は照れ臭そうに頭を掻きながら視線を下に向けた。その仕草が子どもっぽくて海生の口元に更に笑みが刻まれる。幼い頃に見ることのできなかつた子どもらしさが、ここでようやく見られたことへの安堵かもしれない。

「それで、一体何があつた？ 九郎は追放処分され、戻ることはないと聞かされていたが」

「……高天原の都合です。久久能智神が亡くなつたことをご存知ですか？」

「いや。ここは一切情報が入らない。だが、久久能智神の存在は知っている」

そう言うと海生は眉間に皺を寄せて俯いた。「久

久能智神」という名前によつて引きずり出された記憶を憎み、消し去ろうとするかのように……。海生にとつて、久久能智神という名前は忘れたくても忘れることのできる名前ではなかつた。

初めて高天原に足を踏み入れた時、真つ先に父親である天若日子の所へ来た存在。そして、高圧的な態度で海生と父親を引き離し、……殺した。忘れたふりをして忘れるものではなかつた。忘れてなるものかと海生は自分自身に言い聞かせて覚えていた。その存在の名前を聞いて、まざまざとあの日の出来事が思い出される。

——「忌み子」か

——属す場所がないからこそその忌み子であろう

——掟破りのそなたが居場所……か

冷たい目、感情のこもらない声、値踏みするかのよ
うな視線：海生の中では全てがいまだに鮮明に
思い出される。自らを引き離れた後、父親である
天若日子が久久能智神に殺されたと海生は思っ
ている。それ以降、海生の中では高天原は自分達の
世界を守るためなら、カミサマの名前の元に簡単
に一つの命を消すことが出来、それを罪とは思わ
ない奴らの集まりだという考えが根付いている。

「久久能智神。その名前を忘れたことはない：そ
いつが死んだのか」

「はい。仔細は分かりませんが、数年前に亡くなっ
たそうで：」

ダンッ！

九郎が話しきる前に海生は拳を固く握りしめ床
を力の限り叩いた。そして下を向いたまま静かに肩
を震わせる。身の内から湧いてくるのが怒りか、笑
みか、悲しみか、海生自身でもわからないが、何と

も言えない感情が己の中で混ざり合い、ドロドロと
したものを作り出していく気がした。

（そうか、死んだんだ：あいつは。俺の事も、親父の
事も忘れて一人だけしがらみから解放されたんだ
な。）

「ふっ：ふっ：死んだ：だと？ふざけるな！」

「海：生殿？」

「あいつが：久久能智神が俺に何をしたと思う！
俺から全てを奪った！母親を見殺しにして、親父
を殺して：そして俺をここに監禁した！それだけ
の事を俺にしておきながら死んだだと？ふざける
な！」

海生は立ち上がり、庵の外に向かつて叫ぶとその
まま庵を飛び出した。九郎が慌てて立ち上がり後
を追う。海生は庵と外界の境目に立つと勢いよく
手を伸ばした。海生の指先が外界に出ようとす
る寸前で雷のように眩しい光が放たれ、バチバチとし
た音が響く。海生の指先の皮が裂け、肉が抉れて

周囲に血臭を漂わせる。それと同時に焦げたにおいも漂う。そのおいで九郎は気づいた。海生の手が焼けているのだということに。

「海生殿、止めて下さい！　手が…このままでは貴方の手が…」

九郎が海生の腕にしがみついて必死に外界との境目から引き離そうとするが、海生の腕も体もピクともしない。それどころか、更に腕を突き出そうとしている。そのたびに光は更に眩しさを強め、耳障りなバチバチという音は大きくなる。最初は指先だけだった皮膚の損傷が肘のほうまで広がり、九郎が眩しさに目を細めつつ見ると、海生の腕は真っ黒に炭化していく。その様子に九郎は蒼褪めながら先ほどより大声で叫ぶ。

「海生殿！　お願いですから止めて下さい…海生殿！」

九郎がどれほど叫んでも、海生はその声が聞こえないのか動きを止めようとはしない。しかし、歯を

食い縛り、眉を顰めている表情からかなりの痛みを生じているのだろうとわかる。何が海生にここまでさせているのか九郎は分からなかった。ただ海生にこれ以上自分を傷つけてほしくなくて無駄だと思いつきながらも声をかけることしかできなかった。

（ああ…痛みで頭が痺れる。それでもこの俺は俺を開放しない。ああ…不愉快だ。俺は永遠にこの俺から出ることはできない。ここで干乾びるまで生き続けなければならぬ。平穏な人生も、死も与えられないというのに、俺をここに放り込んだやつは何時の間にか死んでいた。どうしてなんだ。俺は未だに生きて拘束されているのに、どうして元凶の奴はしがらみから解放されているんだよ！）

「畜生おやおおおおおつっ!!」

* * * * *
* * * * *
* * * * *

「そういえば：九郎は海生殿と仲が良かったですね」

筆を走らせていた手を止めて独り言のように呟けば、側に控えて本を読んでいた顔が「そうだね」と答えが返ってくる。

「此度、九郎が久久能智神となれば、わたくし達は九郎と海生殿が出会うことを止めることが出来なくなりますね」

「…」

「仲のいい二人の事。きつと九郎は海生殿の過去、天若日子の事を探ろうとするでしょう。そして何を思うのでしょうかね」

「…」

思い出すのは海生と会っていた時の九郎の笑顔。(家族であるわたくし達さえ見たことのない子どもらしい笑顔：物心ついてから、一度もわたくしを「兄」と呼んでくれたことはない。畏まって話して、その瞳に子どもらしさはなかった。何度も九郎と

関わろうとした。それでも何処か遠かった：そんな九郎が初めて心を開いた存在が海生殿だった。二人の親密さが嬉しくもあり、怖くもあつた。九郎は幼い。それ故に自分がしていることの重大性を知らなかつた。けれど、同時にその無邪気さを利用してやうとしたのは父であり、わたくし達だった。九郎を通して海生殿の心の内を探ろうとした。九郎をわざと自由にさせた。)

「今更、過去を悔やんで詫びてもわたくし達のこと事実が消えることはないのですが、出来ることなら、九郎がわたくし達に失望しないことを願いたいです」

九郎から海生の情報は思つたように得られなかつた。反対に、建御雷之男神達の予想以上に海生殿に懐く九郎に周囲は危機感を覚えた。九郎を通じて高天原の内情が知られてしまうのが恐ろしかつた。何も知らない子どもだからこそ、善悪の区別なく仲のいい海生殿に頼まれれば何だつてするだろ

うと誰もが考えた。故に高天原は九郎を追放した。海生殿の手が届かぬ場所に……。

「恨まれるようなことをした自覚は我にもある。大丈夫だ……恨み事を引き受けるのは慣れてる。だが、忘れるな。九郎は久久能智神……高天原の一角を成す神だ」

経津主神はそれだけ言うど執務室を出ていった。後に残された建御雷之男神は先ほど言われた言葉の口の中で繰り返していた。

「久久能智神……か」

庵と外界の境目に立つ海生は痛みが限界にきたのかその場に崩れ落ちた。肩で息をしながら伸ばしていた右手を抑えている。九郎が見てみれば海生の右手は焼け焦げたように黒くなっている。恐ら

く壊死を起こしているだろうと考え、九郎が手当てをしようとするが海生はその手を払いのけた。

「放つときやいい。一週間もあれば治る……こんなところは神の血を引いてるらしい」

項垂れ、焼け焦げた右手を下げたままの海生に九郎は声を掛けた。

「一体……海生殿と久久能智神は？」

「言つたとおりだ。俺が高天原に来た時、俺をここに監禁し、俺の父親を殺したのが久久能智神だ。父親に関しちやあ監禁つて聞いているが、俺は信じちゃいない」

「……殺した……」

その言葉に九郎は動きを止める。高天原は神が暮らす国。そこで行われた処刑の事実言葉に失う。この世界での殺生は基本的に禁止されている。そういった世界で神が殺された事実など、今まで九郎は知らされていなかった。けれど、もし万が一、海生の言うことが事実だとするとその事実を、高天

原が当時子どもだった自分に言うだろうか。否、言わないだろうと九郎は静かに首を振った。

「海生殿、貴方は久久能智神を憎んでいるんですか？」

「ああ、心底憎んでいる。否、憎いという言葉だけで済むような感情じゃない。けれど、もうあいつはいない。俺をここに閉じ込めた奴はいないんだ：：なあ親父」

海生は空を仰ぎながら、問いかけるように言った。
「お父君は生きているということは？ 監禁という処分なら生きている可能性が：：」

「ないだろう。ここに初めて来たとき、高天原の奴らは裏切り者には容赦はしないんだなど分かった。高天原を裏切り、俺という禁忌を生み出した時点で生きるなど不可能だ。あいつは：：久久能智神はそういう奴だ」

遠くを見るようにして言ったあと、海生は立ち上がり庵の中へ戻って行くが、その後ろ姿に向かつて

九郎は言った。

「海生殿。貴方が久久能智神に憎しみを抱いているのは分かりました。では：：何故、僕を罵らないのですか」

その言葉に海生は足を止め、ゆっくりと振り返った。その目に感情は一切浮かんでいない。

「貴方の言葉には、久久能智神に対しての憎しみが今でも宿つています。その憎しみを何故僕に向けないのですか？ 憎みたいなら憎んで下さい。殺したいのなら殺して下さい。貴方は、久久能智神である僕にそうする権利があります」

庵に向けていた足を九郎に向けて、一歩ずつ足を進める。一歩足を進めるたびに、感情を失っていた目は、怒りと悲しみが入り混じっていく。手を伸ばせば九郎に触れられる位置まで来ると足を止め、「どうして」と呟く。

「海生殿。僕は、貴方が殺したいほど憎い久久能智神です」

静かにそう言い、全てを受け入れるような穏やかな表情を浮かべた。

「どうして、どうして、どうして……どうしてだよ！」海生はそう叫ぶと、勢いよく九郎の首を掴んで、力を込めた。九郎は何の抵抗もせずにその手を受け入れた。重ねられた海生の両手に力が籠められる。左手にしか力が入らず、うまく締めめることはないが、それでも少しずつ氣道が締め付けられ、呼吸が出来なくなり、息苦しさが九郎を襲う。それでも九郎は抵抗しない。海生は「どうして」と呟き続けながら九郎の首に力を入れていく。何時の間にか、九郎は膝から崩れ落ち後ろに倒れ、海生が上から力を加えていた。その衝撃で炭化した右手がポロポロと崩れていく。崩れていく腕の焦げ臭さを嗅ぎつつ、九郎は自分を殺そうとする海生を静かに見つめる。海生の目からは涙が流れ落ち九郎の頬を濡らしていく。

「どうして、お前まで……」

海生の心の中では様々な思いが渦巻いていた。

どうしてお前まで神になってしまった

どうしてお前が久久能智神なんだ

どうして帰ってきた

どうして俺に真実を告げた

お前が神にならなければ良かった　そうすれば俺は……

どうして久久能智神など継いだ　何故よりによつ

てその名を……

お前が帰つてこなければ俺はお前の就任を知らなかったのに……

どうして真実を伝えた　知らなければ　お前が

神にならなければ……

お前を殺したいわけではないのに

お前に恨みをぶつけないわけではないのに

どうして記憶の中の九郎のままできてくれなかったんだ

どうして…

海生は涙を流しつつ、その場に膝をついた。ゆつくりと九郎の首から手を放した。息苦しさから解放された九郎は少しずつ体を起こし、泣き崩れる海生を見つめていた。そうして九郎は知るのだった。海生の中にある、数千年たつても色褪せることのない恨みと憎しみ、そして自分に向けられた愛情に…。九郎は泣き崩れる海生の姿を見つつ、呟いた。

「調べてみましょう…お父君のことを」

その言葉に海生は一瞬、声を止めて九郎のほうを向くが、その眼には「何を馬鹿なことを」という感情がありありと浮かんでいた。海生は自らの立場も、父親である天若日子の立場も嫌というほど分

かつていた。自分たちに関することを調べても何も出てこない。否、調べることにすら許されていないのではないかと海生は考えていた。自らが高天原に来て既に数千年経っているのにいまだに自分の存在を知る者はほとんどいない。それは自らの存在が闇に葬られているということだと、海生は考えていた。

「無理だ。調べられるはずがない」

「実際に調べてみなければわかりません」

海生は九郎を睨みあげて叫んだ。

「調べられるわけがないだろう！お前は知らないんだ。裏切り者の存在を、高天原がどれほど嫌い、その存在を消したがつているか知っているか？裏切り者の記録をあいづらが残しているはずがない！」

「調べてみなければわからないでしょう！」

九郎は海生の両肩を掴み押し倒した。生まれて初めて見上げた九郎の顔に、海生は言葉を失くした。いつの間にかこれほど大きくなったのだろうと思いつつ、海生は自分がいつの間にか全てを諦めていた

ことを思い知らされた。自らが忌み子であること知り、異端だと知らされ、庵に隔離され、全てから引き離されたと思っていた。海生にとつて高天原は自分から全てを奪い取り、自分に何も与えない存在で、だからこそ何を望んでも無駄なのだと思ひ込んでいた。否、思い込むことで海生は自分にとつて理不尽な世界から逃げていた。それが九郎の言葉によつて気付かされた。

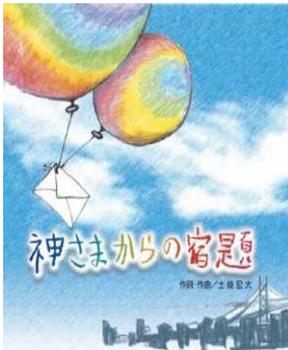
「全ての記録が抹消されたという確証なんてない。もしかしたら残っているかもしれないじゃないですか。それに僕は…神です。神にしか閲覧できないものがあるかもしれない。そこに何かが残っているかもしれない。もしかしたら、海生殿のお父君だつて生きて何処かにいるかもしれないですよ！」

そこまで言つて九郎は堪えきれなくなつた涙を流した。海生は零れ落ちる九郎の涙を自らの顔で受け止めながら、いつのまにか変わつてしまつた自分と

九郎の時の流れを感じていた。呆然とする海生から目を離さずに、九郎は決意を秘めた声で呟いた。「僕が絶対に調べてきます」

続く





F O P

しんこうせいこつかせいせんい いけいせいしょう
進行性骨化性線維異形成症 (Fibrodysplasia Ossificans Progressiva : FOP)とは結合組織に発生する稀な遺伝子疾患。発症率は200万人に1人。筋肉などが骨に変わります。

◆明石でも市立明石商業高校1年生の山本育海君がFOPです。

◆2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し、ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

◎「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、絵本の日本語版及び英語版のiPhoneアプリも完成しました。

◆治療薬の研究費にあてる募金も行っています。
ぜひ、ご協力下さい。

◆問い合わせは『いっくんを応援する会 - FOP明石 - 』

事務局 office@fop-akashi.jp (メール)

◆<http://fop-akashi.jp/office/> (HP)

◆絵本やCDの販売も行われています。(点字版もあります。)
絵本は1冊500円(送料別 - 3冊まで送料: 飛脚メール便で80円)

メール ehon@fop-akashi.jp

D-FAX 020-4622-7570

◎申込方法: メールまたはFAXにて、お名前、郵便番号、住所、電子メール、電話番号、注文部数を明記の上、お申し込みください。

◎学校での教材セットもあります。お問い合わせ下さい。

長生きの秘訣

胃弱亭 骨人

今年の夏は殊に熱かった。京
都は湿度も高く、カラッとした
夏空はほとんどなく、サウナと
化した町中で、小生は連日格
闘を繰り返し、必ずや訪れるで
あろう秋の冷気を頼みにひたす
ら耐え続けた。おかげで胃弱な
小生にとつては、楽しみとなるべ
きは、三度の食事も、もはや
体力を維持するための義務的
な行為と成り果ててしまった。

じることができるようになってき
たかと思うと、もうこの原稿の
締めきりが迫って来て頭が重く
なる。夏バテが抜けきらぬこの
時期は何もやる気が起こらず
ただ気持ちばかり焦る。それは
正に、課題を残したまま夏休み
を終えて新学期を迎えようと
する中学生の心境に近い。中味
はともかく形だけでも繕って何
とか未提出だけは避けたいとい
う思いで作文用紙に向かつてい
る。

なお姿にはひねくれ老人の小生
も素直に敬服できるのだが、そ
の老人にインタビュする司会
者の質問内容がひつかかる。番
組の中で多くの司会者が必ず
と言ってよい程次の愚問を呈す
る。「お元気ですね。長生きの秘
訣は何ですか？」と。しかしよ
く考えると、長生きに秘訣など
あるはずがない。本人だつてわか
らないはずである。長生きは、た
またま親から丈夫な体を頂い
て、たまたま大きな病気や事故
に会わずに生きながらえて来た
結果である。ところがいざ質問
されると、本人は己の努力の結
果であるかの如く錯覚に陥つて、

九月も半ばを過ぎて、朝夕の
冷え込みが肌心地よく、やつ
と食べる事の喜びを人並みに感

や異常に元気な御老人がテレ
ビに登場される。老人方の元氣

素直に己の強運への感謝でも述べればよいものを、中には「若い頃から好き嫌いなくなんでもよく食べるようにしています」とか、「今でも三度の食事をおいしく頂いております」などと、優等生ぶつた返答をするものだから、小生はカチンとくる。それは長生きの秘訣ではない。あなたが運よく丈夫な胃袋をもち合わせ、その年になつても一向に衰えぬ旺盛な食欲を保持しているだけのことだ。

人がおいしいものを口にするのは、男が美しい女に目がいくのと同様、本能的な行為であり、そこに努力や工夫は存在しない。つまり食べ物をおいしく頂く

ための食欲は本人の努力や工夫の結果生み出されるものではなく、健康な胃袋を持ち合わせた結果である。もし食欲が努力の結果生み出されるものであるならば、世にかくも多くの肥満は存在しない。「体に良い物を食べるように心がける。」など人はよく言うが、胃弱な者にはいくら体に良い物と言われてもそれを口にできないことすらあるのだ。己が丈夫な胃袋を持ち合わせているという幸運に気がつかぬ者に限つて、「何でもよく食べる」などと、軽薄な言葉を口にするのである。いずれにせよ、本人の努力や工夫もなしに旺盛な食欲を保持し、生命を維

持し続けている長寿者を特別賞賛する必要はない。

一方、ある番組で同様に「長生きの秘訣」を質問された元氣な御老人は、小指を立てて、「恋をするからです。」と答えておられるのを見た。恐らく本人は「生きがいをもて」という意味でおつしやつたのであろうが、「生きがい」は確かに元氣・活力の元にはなるが、「長生き」の秘訣にはならない。「生きがい」を持つことで長生きできるのなら、世の中涙を誘うようなドラマは生まれぬ。氣力で百歳を迎えようとしている人を小生はそれほど多くは見かけない。それより活力あふれる老人もそこそこの

年令でお亡くなりになるのをよく見かける。長生きは努力の賜物ではないその人の運命である。故に人はその命を寿命と呼ぶのである。

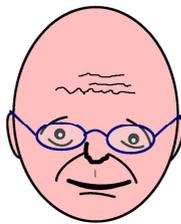
ここで話をもとに戻すが、賢明なる読者はもうお気づきであろうが、前述の司会者の質問は「長生き」と「健康」を同義ととらえている所にまちがいがある。正しく質問するならば「健康の秘訣は何ですか？」と問うべきである。ところがこの誤りは結構多いのである。「長生き」と「健康」は確かにつながりはあるが同義語ではない。「健康の秘訣」はあつても「長生きの秘訣」は存しない。

今年も、我が京都マスターズ陸上が誇るスーパージョージ・宮崎秀吉さんがテレビに登場しておられた。今年百二歳になられていたがトラックを疾走されるお姿はとて同じ人間とは思われない。その番組の中で司会者は図らずも「長生きの秘訣は何ですか？」と質問したが、さすが宮崎翁、笑みを浮かべながら、「耳が遠くなることですわ」と、お答えになつていた。なるほど納得できた。いやな事は聞かないことか……このあたりにひよつとしたら長生きの秘訣があるのかも知れない。

もしも小生が百歳の長寿を得て、「長生きの秘訣は？」と聞

かれたら、即座に「死なないことです」と答える準備はしているのだが……。今年でやつと十六歳、長寿大国日本ではまだまだ本物の老人になりきれない胃弱でいびつな老人のつぶやきでした。

完



人間ドック

小野村 新

司会者が開会を告げると、緞帳がゆつくりと上がった。市民会館の大ホールの舞台には、来賓席と主催者席が対面するように設置され、その上には、「平成十三年度T市人権教育研究大会」の横断幕がかけられている。司会者のすぐ横の主催者席の中の女性役員に、里見は見覚えがあった。記憶のひだが揺れ動き、まもなく、大きな目をした華奢な体躯の女性が、脳裏に現れた。田口初子であった。今では、首も胸も腰もひとまわりつた太つた彼女が、濃紺のスーツに身を包んで壇上に座っていた。司会者が初子を紹介した。

「人権教育研究協議会副会長で、朝日小学校校長の田口初子でございます」

初子は立ち上がり、「よろしく願いましたま

す」と深く一礼した。里見は胸の鼓動が高まるのを覚えた。

四十三歳の夏、里見は初めて人間ドックを受けた。高校の教員である彼は、夏休みは計画的に年次休暇を取ることができた。その休暇を利用して、七月末の火曜日と水曜日に三木市のJ病院で、一泊二日の人間ドック入りを果たしたのである。その時に、田口初子と知り合ったのだった。

一日目の朝、控え室でドックの日程説明を受けた。他の三人は、すべて小学校の女性教員であった。その中にひとり、目を引く人がいた。ほつそりとした長身に、赤いバラの花柄のワンピースがよく似合っていた。生き生きとした大きな目が印象的で、その華やかな容貌はモデルのようであった。その女性が田口初子であった。病院の事務員が、今夜は西神

オリエンタルホテルに宿泊してもらうと説明した。それも、宿泊するのは初子と里見のふたりだけだという。それを聞いたとき、自分がジャージしか持つて来ていないことが頭にひらめいた。

三日前に、同僚の鈴木さんが、「丁病院の病室のベッドで宿泊しますから、何の準備もいりませんよ。洗面道具とパジャマがあれば十分です」と教えてくれたのであつた。あきらかに彼女の誤報であつた。しかし、今更どうしようもない。せめて、ポロシヤツと綿パン姿で来ていたら、と悔やまれた。

昼食後の休憩時間も初子といつしよだつた。彼女はガウン状の検診衣を着て、他の女性とテレビを観ていた。みのもんたが司会をしている『おもいッキリテレビ』である。コーヒーが健康にいいというテーマを掲げて、その番組は進行していた。コーヒーが一部のガンや糖尿病を抑えるらしい。里見は新聞を広げてはいたが、目は機械的に文字を追つてい

るだけで、意識はテレビの方に吸い寄せられていた。「コーヒーつて、すごい飲み物なんですね。初めて知りましたわ」

「コーヒーは、むしろ体に悪いと思つていましたのに」

そのような会話を、初子たちは交わしていた。

一日目の検査がすべて終了し、タクシーの後部座席に、初子と並んで座つた。里見は、それだけで何か幸せな気分になることができた。彼は、自分の服装がラフなことについての言い訳ばかりしていた。こんな格好でもホテルに入れてくれるのか、と冗談交じりで話すと、それを聞いた初子と運転手は、大きな声で笑つた。三十分ほどでホテルに着いた。タクシーを降りて夏の夕空を見上げると、高層の白い建物が輝いて屹立していた。豪華なホテルである。フロントで、二人並んでチェックインの手続きをした。初子は品の良い赤いワンピース、里見は着古した白いティーシャツに、すそのすばんだ水色のジ

ヤージズボン。周りには、いかにもアンバランスなカツプルに映つたであろう。それにしても、この光景をだれか知人でも見ていたとしたら、不倫と疑つたに違いない。田口初子の客室は、里見の隣だった。どちらからともなく誘い合わせて、食事に行つた。一階のレストランは家族連れでにぎわつていた。このホテルのレストランの料理は好評で、食事だけの目的の客も多いようだ。里見はウェイターにビールを注文した。明日、胃部X線検査があるが、一本程度のビールなら影響もないだろう。

女性とふたりだけで食事をするのは、幸子と別れて以来のことで、十年ぶりである。奇遇とはいへ、このような素敵な女性と食事ができる機会があるうとは。幸子とは七年の間連れ添つた。幸子も里見と同じ高校の教員であつた。彼女は剣道部を担つており、その指導に特別に熱心だつた。休日返上で、ほとんど家にいなかった。里見もけっこう多忙な日々を送つていたが、その比ではなかつた。幸子は、

子どもをつくる気など全くなかつた。そのことで、いつも口論となつた。子どもができていたら、おそらく離婚までは進まなかつたであろうのに、と里見は今でも思う。

独身にもどつてから、里見は寂しさを紛らすため、風俗店に通つたこともあつた。しかし、行為のあとに残る切ないようなむなしさに嫌気がさし、通うことを止めた。結婚願望はまだ残つていた。周囲の人が勧めてくれた縁談に乗り、相手の女性と会つたこともあつたが、結局は実を結ばなかつた。

目の前にいる初子は、人の妻である。時々甘えるかのように話すしぐさは、別れた幸子にはないものだつた。幸子の性格は、すべてにおいて潔癖で堅かつた。女性的魅力に欠けるといつてもよかつた。

コーヒを飲みながら、突然、初子は仕事のことを話しはじめた。

「人が相手の仕事はやつぱり大変ですね。最近はずくづく教師という職がいやになつて、辞めることは

かり考えていますわ。」

「そんなに大変なんですか？」

「精神的に不安定な生徒が増えていっているんです。五年生の担任しているんですけど、新学期早々、クラスの子同士がとつくみあいのけんかをしてましてね、一方が額を三針縫うけがをして、双方の保護者の間でもめにもめたんですよ」

初子は、もう自分には限界だというふうな表情を見せた。甘い声や話しぶりからは、真に迫った感じはしない。それにしても、初子にこのような悩みがあるとは、思いもよらなかった。

「そうですね。そりゃあ、難儀なことですね。その点、高校生はやりやすいのかなあ。いくらやんちゃな生徒でも、大人としての分別をある程度は持っていますから」

「そういえば、あの選手も高校生ですよね」

初子が指さした壁面には、高校生ゴルフアーのポスターが掲げられていた。甘いマスクと果敢なブ

レイスタイルで、絶大な人気を誇っている。

「彼、すごい人気ですね。」

「ええ。去年、一度だけトーナメントで見たことがありますけどもかつこいいですよ。……ところで、里見さんはゴルフはされるのですか？」

期待感のこもった、窺うような目つきで初子が尋ねた。

「いいえ、まったく。」

里見は、そつけない返事になってしまったことを後悔した。

「わたしは主人の影響でゴルフを始めて二年になるんですが、とてもおもしろいスポーツですよ」

「そうですね。ぼくはテニスを時々やるのですが……でも、テニスはこの年ではハード過ぎて。そろそろ、ゴルフでもと考えはじめていますよ」

里見は、思ってもいないことを言っ、初子の気を引こうとした。

「それはすばらしいわ。……そうだわ、今度、ABC

ゴルフクラブで、男子プロのトーナメントがあるんですが、一緒に観に行きませんか。主人と毎年行くんですが、残念ながら、突然海外出張がはいってしまったんです」

「喜んでお供しますよ。でも、ご主人はどこへ出張されるのですか？」

「中国なんです。来週の月曜日から一ヶ月の予定で……」

夕食を終え、エレベーターで客室まで帰った。自分の客室の前まで来て、初子は意味深長なことを言った。

「今日は疲れてないので、眠れるかどうか心配だわ」

里見は、時計を見た。まだ八時半である。

「ぼくの部屋で、しばらくテレビでも観ませんか？」口まで出かかった里見の言葉を遮るかのように、初子は「じゃあ、おやすみなさい」と一礼して、部屋に消えた。

翌日は朝から雨が降っていた。ホテルまで、昨日と同じタクシーの運転手が迎えに来た。車中では、またゴルフの話になった。

「今日、息子はゴルフにでかけましたよ。会社のコンペらしいんですが、この雨じゃねえ……」

運転手は、いかにも残念そうに言った。

「どちらのゴルフ場なんですか？」

初子が、さも興味深そうに尋ねた。

「花屋敷ゴルフクラブです」

「名門じゃないですか、あそこは。春には毎年女子

プロの試合も開催されますしー」

その後、二人は県内のゴルフ場名を挙げて、そのゴルフ場の品定めを続けた。自治会で集まった時にも、話題はプロ野球かゴルフに決まっていた。ゴルフにもプロ野球にもほとんど興味のない里見にとつて、自治会行事におけるよもやま話は、ことに苦手であつた。

二人の会話を黙って聞いていた里見を氣遣つてか、「こちらの里見さんと、今度ゴルフを觀に行く約束をしたんですよ。」

初子は、いかにもうれしそうに話した。

「ああ、マイナビチャンピオンシップですね。ABCゴルフクラブは戦略的に設計されたコースで、とくに最終ホールは十八番はトリッキーに作られていて、毎年さまざまにドラマが生まれるので有名なんですよ。ぜひ、觀に行つてこられたらいいですよ」

運転手が力のこもった声で里見に言った。

二日目は心電図と胃部X線検査があり、午前十一時にすべての検査が終了した。里見は、病院の玄関で初子と別れた。今日の初子は、黄色い色調のワンピースを着ていた。それがまた、よく似合っていた。駐車場まで歩く初子の姿は、夏の陽光を浴びて、そこだけが浮き立って見えた。

お盆を過ぎているとはいえ、八月二十日は酷暑

だった。ギャラリー駐車場まではお互いの車で行き、そこで初子と落ち合うことになっていた。初子は今日はどんな格好で来るだろう。里見は、長い脚にフィットしたジーンズ姿の初子を勝手に想像した。しかし、約束の七時になつても、初子は現れない。満車のギャラリーバスが、次々と出発して行くのを見て、いらだちの氣持ちをおさえられなくなった里見が、携帯電話を取り出そうとするや、呼び出し音が鳴った。

「突然ですが、今日は行けなくなつてしまつたんです。下の子どもが高熱を出して……。あいにく、母もひどい腰痛で……。すみません、本当に」

いつもより早い口調で、申し訳なさそうに初子は言った。

里見は落胆した。今日は初子と楽しいデートだと期待していたのである。それでも、氣を持ち直してひとりでゴルフトーナメントを觀戦した。日曜日なので、数多くのギャラリーでにぎわつていた。想像

していた以上に、ゴルフ競技はおもしろかった。ゴルフ用具を買って、打ちっ放しのゴルフ練習場にも行ってみるか、そういう気持ちがいってきた。もちろん、初子との共通の話題を作ることも、その目的ではあったが。

翌日、初子に電話を入れた。子どもはインフルエンザで、現在自宅で安静にしているらしかった。トーナメントを観て、自分もゴルフの練習を始める気になったことなどを告げて、その日は電話を終えてみたが、体よく断られてしまった。そのうち、初子は携帯電話にも出ようとしくなつた。人妻に誘いをかけている自分にはばかられたが、里見は初子に無性に会いたかった。時には、彼女が夢の中にまで現れることもあつた。しかし、そのような初子に対する思いも、移りゆく多忙な年月の中でいつの間にか薄らいでいった。

開会行事が終わりいつたん下げられた緞帳が、再び上がった。舞台では、パネルディスカッションが始まった。テーマはいじめに関してで、市内の高校生と中学生がそれぞれ二名ずつ、パネラーとして参加していた。そのコーディネーターを田口初子が務めていた。自己の体験を交えた中高生たちの意見を、初子は上手にまとめ、シンポジウムを進行させていった。そして、最後に、要領よくシンポジウムを総括した。その凛とした姿には、女性校長としての威厳が感じられた。里見の思い出の中の初子はすっかり消え失せて、別人の田口初子がそこにはいた。



祈り

「わあ！びしょぬれ」

「急に降ってきたなあ」

突然の雨に雨宿りをした。大粒の雨が地面をたたき時折稲光がしている。雷もなりだした。雨に濡れた服をふきながら、恵美子は隣にいる人を見た。

「あつ、この前の……」

「僕の定期券を拾って交番に届けてくれた人ですね」

魅華

「まあ、奇遇だわ」

「ほんとですね」

2週間ほど前に、さとしは買って間がない定期券を落としてしまった。諦めきれず最寄りの交番に届けを出しに行った時、偶然拾った人が届けてくれたところだった。その人が恵美子さんだった。

「あの時はありがとうございます。本当に助かりました」

「いいえ、当たり前のことでしたまでです」

さつきまで大粒だった雨も、小

雨になってきた。

「小雨になりましたね。これから何か用事がありますか」

「いいえ、家に帰るところです」

「それでは近くでお茶でもいかがでしょう。お礼と言っては何ですが」

道を挟んだ前の喫茶店に入った。年齢の近い二人はすぐに打ち解けた。縁の不思議さを感じた。落し物をしなければ恵美子さんには会っていない。それとも一つ偶然なことは、親同士の郷里が岡山県倉敷市だった。そ

れが分かつてからは、なおさら
氣持ちが近づいた氣がした。

「また、お会いしたですね。よ
かつたら連絡先を教えて頂けま
せんか」さとしは言った。恵美子
はそつとメモを手渡した。

そして季節が夏から秋へと移
り変わり、秋も深まってきた頃
恵美子にさとしから連絡があつ
た。なかなか連絡ができなかつ
たのは、さとしの母親が体調を
崩し入院したからだつた。

次の日曜日二人は会う約束を
した。1時に食事をするること
になった。家を出るのが遅くなつた
恵美子は待ち合わせ場所へと

急いだ。さとしが先に着いていて
恵美子を見かけると手を振つ
た。

「ごめんなさいね。遅れて」

「僕も今きたところですから」
食事をしながら話題は、さとし
の母親のことになった。元々体は
弱かつたがだるさが続くので検
査を受けると、肝臓がんが見つ
かつた。その時にはかなり進行し
ていて、余命半年と宣告された。
あまりのことに受け入れられず
にいたが、母に氣づかれてしまふ
と前を向いた話もした。しかし
本人は、薄々感づいていて、最近
では「私長くないんじゃない」と
口にすることもあると言う。

さとしの辛さが伝わってきた。

それに、忘れようと思つても忘
れられない人がいることも打ち
明けられたと、さとしは言う。
結婚まで考えたが親の反対に
あい、駆け落ちしたが居場所が
分かつてしまい、連れ戻されてか
らはその人とは二度と会えずじ
まいになつたと、涙ながらにさど
しに話した。

辛い過去を聞き、恵美子は思わ
ず涙ぐんだ。

母に「その人に今でも会いたい？
つて聞くと、「会つてみたい」と言
うんです。」

「会わせてあげたいですね」と恵
美子は言った。

かと言つてこれという手がかりのない二人が、この先会えるのだろうか？

重い空気を感じて、さとしはお互いの趣味の話始めた。

家に帰つてからも恵美子は、さとしの母のことを思い続けた。それに気づいて父が、「珍しく考えごとか？」とソファアに座つた。

「そうなのよ。この前話した定期券の彼のお母さんの話なんだけどね」

そう言つて父にすべてを話した。辛い話だなと言いながら、父の顔がくもるのを感じた。

「そのお母さん、岡山県倉敷

市の人だつたね。何時ごろまでそこにいたんだろうね」

「どうしてそんなこと聞くの？」怪訝そうな顔をしながら、

「25歳くらいまでつて言つてたかな。美容師さんだつたそうよ。若いのに腕がいいから、結婚式場からもよく声がかかつて、文金高島田を結つてたんだつて」
「文金高島田！」顔色がさつと変わった。

「さつきからどうしたの」

「ちよつとタバコを切らしたみたいだ」

ソファアから立ち上がり、玄関を出た。雄二の頭には何十年経

つても、いや生涯忘れることのできない人の顔が浮かんだ。あの人も美容師だつた、結婚式場にもよく行くと言つていた。結婚する時には、私も和装で今度は人に文金高島田を結つてもらいたいと、嬉しそうに話していた。世の中には似たような話があるもんだ。封印していたことを思い出したが、考えまいとした。

家に帰つてからも雄二の心は落ち着かなかつた。思わず台所に立つている恵美子に、「しつこいが、お母さんの名前は何て言うんだい？」と聞いた。「ほんとにおかしい、そんなことまで聞くなんて、慶子さんよ」「慶子……」絶句した。

思わず庭に出て一点を見つめながら、世の中似たような話はいくらでもある。郷里が同じで、名前も職業もいつしよ、年齢もあの時と重なる……たまたまだと首を振りながら、自分にそう言い聞かせた。

妻とは30歳を過ぎた頃に見合いで結婚し、一人娘を授かり色々なことはあつたが、人並に家も建て娘も親思いな子に育つてくれた。妻は社交的で明るい性格でフラダンスを教えに、忙しく日々を過ごしている。夫婦もつかず離れずの関係でうまくいつている方だと思う。ただ自分の人生を振り返つた時

に、結婚の約束までしたある女性を、幸せにしてやれなかつたことが心のどこかにある。自分に勇気があれば、彼女の手を離さずに済んだのではないか、随分と責め続けた。今更ながらに悔しく思う。

慶子という名前を聞いてから、雄二の心からそのことが離れなくなつた。いつものようにしてつもりでも、恵美子には感づかれた。

「お父さん、この頃ぼんやりしてることも多くない？何かあつたの？」

「いやいや、いつもと変わらな

いよ」そう言いながら見る気のないテレビのスイツチを入れた。
「そんなことないよ。この頃いつものお父さんじゃないもの」娘にそう言われると、

「いやあ、慶子さんと言う人と若い頃つきあつてたから、あの名前を聞くと驚いてね」

「それだけで！？」 お父さん、正直に話して！隠してることがあるわね。私ももう子供じゃないわ、何を聞いても驚かないから話して」雄二は真面目な顔になつて、

「このことは、お父さんの心のだけに仕舞つておきたかつたのだが、若い頃に結婚の約束を

した人がいて、親の反対にあつて結ばれなかつたんだ。その人の郷里も職業も、名前も同じだったから考え込んでしまつてね」

「そういうことがあつたのなら、気になるかもしれないけど、さとしさんのお母さんと決まつたわけじゃないし。でも、さとしさんのお母さんも好きな人とは、親の反対にあつて結婚できなかつたつて：これ偶然？」

「そうなのか！」また考え込んだ。

それから時が流れ、クリスマスに会う約束をしていた二人は、駅前大きなツリーの前で

出会つた。美味しいと評判のイタリア料理のお店へと向かつた。「ああ、美味しかった。人気なわけね」

「そうそう、頼まれてた母の写真」

「ありがとう、綺麗なお母様ね。お体の具合はどう？」

「よくないんだ、黄疸もきつくなつてきたし、腹水も溜まつてきてる」

家に帰つてから雄二に写真を見せながら、今の容態も話した。

「慶子さん：：間違いはない：慶子さんだ。ああそんなに悪い状態なのか」目に涙を浮かべた。

「お父さん、勇気をだして会つてきたら。お母様は会いたいわつておつしやつてるそうよ。半年も生きられないのよ。しばらく考えてみて」

「…」

その日を境に慶子の容態は悪化していった。時に夢と現実の区別もつかないこともあつた。雄二は悩んだ。夜も眠れなくなるくらい悩んだ。そして、会うのはよそうと思つた。今までどおり、影から彼女のことを見守つていよう。生涯あの人の名前を聞く日がくるとは思わなかつた。そう遠くない所で暮らしていたことが、夢のようだ。

昏睡状態になった知らせを聞いたのは、それから一か月後のことだった。

そしてほどなく帰らぬ人となった。

それを聞いた雄二はひとり、男泣きに泣いた。後ろにいた恵美子は声をかけずらかったが、

「慶子さんはお父さんに出会えただけで、幸せだったって。意識のある間におっしゃったそうよ。だからもう自分を責めないで、悔やまないで。ねえお父さん」

後ろ向きになったままで、うなづいた。幸せだったと言う言葉が、

雄二の心を少し軽くした。今は亡き慶子さんに「出会えて幸せだったよ」とつぶやいた。



ビューティフル・ドリーマー

高阪博一

夜来の雨は止んでいた。二階にある寢室のカーテンを開けるとガラス窓に雨の筋がまだ残っていた。窓を通して、川の堤が見える。家は小さな公園を挟んで川沿いに立っている。山本さんは大きく伸びをして、薄い茜色になっている東の空を眺めた。「水嵩はどうやろう。あの狭い川幅やからなあ。ここから見えんけど、上昇しているやろうなあ」と吹きながら、堤に目をやると、既に歩いている人達の姿が目に入った。「また、一日が始まるなあ。それにしても、年寄は起きるのが早いわ、特にこの頃は。まあ、自分もそうなんやけど」笑いながら、カーテンを閉めた。

奥さんはまだ眠っている。起こさぬように、Tシャツと半ズボンに着替え階段をそつと下りて、スニー

カーを穿き玄関のドアを開けた。朝のウォーキングを始めようと公園を横切つて、山本さんは川の堤に出た。「何年になるかなあ。定年退職したんが、六十歳。今、六十五歳やから、五年か。もう、そんなになるんや」と小さな声を出しながら、川上の方を向いて歩き出した。

雲が切れて薄い茜色が消え、徐々に明るい陽が射してきた。堤の斜面は雑草に覆われている。キラキラと細かな水玉が光っている。そんな草に交じつて、多少青味の混ざつた赤色の可憐な花が咲いていた。子供の頃、あの花をむしり、蜜を吸つたものだ。「ええつと、あれは、なんやったかなあ。確か……。あかん、出てこん」誰かに名前を教えて欲しそうに、山本さんはそんな言葉を口にしていった。「いつも傍を歩いているというのにね。今頃、気が付くとは。やつぱり、ほんま、間違いなく、歳なんやなあ」自嘲気味に、軽く呟いていた。

歩くスピードは遅い方かもしれない。一年程前に腰を痛めた。ひよいと重い物を持って、あつとなつてしまったのだ。歳が歳だ、なかなか直らない。弱つた事に、未だ週に何回か病院に通っている。そんな事もあつて、十分で百歩程度のペースだ。万歩計はいつも身に付けている。朝は四千歩以上を目標としているが、一人で歩いていると、つい怠けたくなる。それでも三千歩以上はいつも歩こうと努力している。夕方歩くが、これは気が向いた時だけだ。「腰ももう一つやし、運動不足やなあ」山本さんはメタバなお腹を眺めながら、つくづくそう思った。

誰かと一緒に話しながら歩けば、もつと歩けそうな気がする。毎日同じ時間やコースを歩いていると、決まった人と出会う事が多いものだ。挨拶程度で始まった出会いが、何回に一回は一緒に歩くようになった人もいた。歩きながらの話だから、他愛のないテレビの話題やスポーツの事などだが、時間を忘れる時もある。それでも、三十分もすると歩く

のが嫌になつてくる。山本さんは全く体育会系の人ではない。「ほんと！ミスター・スタミナレスな人やから」奥さんがいつも笑いながら言う台詞を思い出していた。

多少汗ばんでいる。明るさを増した陽が次第に高くなつてきた。万歩計を覗くと、三千歩は超えて、四千歩に近づいていた。「そろそろ、予定数、終了やね。あれ、今日は知った顔に会えへんなあ。暑いからやろうか」山本さんは独り言を言いながら、前を向いた。赤い小さな花をつけた、幹のつるりとした木が目にはいつた。「ええつと、これは何やつたけ？分かるわけないよなあ。それにしても長い事、咲いている気がする」目を遣つた長い枝の先に褪せた色の塊が、何となく不安げに揺れていた。

家に帰るとダイニングテーブルに新聞が置かれていた。奥さんは既に起きている。ふんわりとした珈琲の香が漂っている。勤めている頃はインスタントで済ましていた。味や香より早さが大事だった。

朝は一分でも余計に寝たかつたのだ。今は時間に追われる事はない。ペーパーフィルターでゆつくりと淹れるのだが、別に豆がどうの、焙煎の仕方がどうのと拘るタイプではない。自分が淹れるより、奥さんの淹れる方が上手いくらいだ。ゆつたりと椅子に座り、新聞を広げて、好きなカップで静かに珈琲を飲む。目の前に坐る奥さんが黙って山本さんを見つめている。こんな朝の時間が、生きる事の黄昏時をそろそろ迎えている山本さんには、いとおしくてならなかつた。

「今日はどうするの。病院に行くの？」カップを持つて、ダイニングにやつて来た奥さんが尋ねた。「この何日か、行つてないしなあ。腰が何となく重いから、今日は行くわ。それに、今朝の散歩で知つた顔に会わなかつた。あんた以外の人と喋りたいもんなあ」山本さんは冗談めかしに言いながら、奥さんを見つめた。「そう」と短い返事があつた。一呼吸おいて、「もう、權咲ムクゲいていた？萩は未だ早いかな。あ、ご

めん。植物音痴のあなたに訊きいても、仕方なかつたね」奥さんは、そう言つて、じつと見つめ返している。「音痴はテレビではブーやで。植物の名前を知らない人と言つてくれるかなあ」山本さんが言い返すと、奥さんは悪戯つぼく含み笑いをしながら、珈琲カップを口に運んでいた。

病院は自転車で十五分程度の所にある。総合病院というには程遠く、医院というには規模が大きい。地方の病院はそういったものが多いようだ。内科・外科・整形外科・放射線科・リハビリ科があり、MRIやCTなど検査機器も備えて、一応の診断や治療は出来る。近隣で唯一の病院だつた。それでも複雑な手術などの場合は県立病院を紹介していた。

通院する人は高齢者が多かつた。若い人は健康で数が少ない。高齢者が多い地方都市となれば、多くなるは当然の事だ。だが、それだけではなく、高齢者が通いたくなるような病院だつた。待合ロビ

ーには大きな革のソファアが数多く置かれ、湯茶やジュースなどは飲み放題だし、童謡や懐かしのメロデーがBGMにゆつくり静かに流れ、職員の対応が親切で丁寧であつたので、まるで、何処かのホテルにでも来ているような感じを抱く場所であつた。「朝早く行くと、あの人らに会えるなあ。ほんの数日なのに、凄く会わなかつたような気がする。懐かしいは言い過ぎやけど、それに近いかも：」山本さんは楽しそうにちよつと微笑んで、カップに残つていた珈琲を飲み干した。

診察は午前九時からなのだが、八時頃にはぼちぼち高齢者を中心に人が集まり出している。「何で年寄りばかり起さるのが早いのか？寝るのが早いから。何で寝るのが早いのか？する事が早いから。何でする事が早いのか？する事が思ひ付かないから。何で：もういいわ。切りがないね」診察券を受付機械に通しながら、この頃やけにブツブツ独り言を

言うようになった自分に気が付いて、山本さんは苦笑いを漏らした。辺りを見回しても、知つた顔が見当たらない。受付機械の見えるソファアにゆつたりと腰を下ろし、壁に掛かつているリトグラフのシャガールをぼんやり眺めた。

腕時計を見ると八時を二十分も過ぎていた。「この時分は早い筈なんやけど。今日は通院しないつて事？ 待てよー、まだ四十分もある。何でこんなにイラチなんやろう。昔はこんなんじやなかつたのに。残り時間が少なくなつてきたつて事やね」またまた苦笑いを漏らしてしまつた。「ええつと、スポーツ新聞は？ここは普通の新聞が三紙に、スポーツ新聞が同じように三紙。それに雑誌が四冊。まるで喫茶店や」そんなことを呟きながら、ソファアから立ち上がろうとすると、向こうの方で手を振る男性が目に入った。「あー、ご来院ご来院、井口さんや」山本さんの顔がぱつと明るくなつた。「ヤマちゃん、久しぶり」

「こちらこそ。まだ、たつた二日ですよ。久しぶりの
範圍やないと思います」が

「何言うのよ。毎日会えへんかつたら、私等の間では
久しぶりやんか。ちよつと、オーバーやけど」

「そやそや、そやつた。井口さんは皆勤賞なんです
ね」

「そやがな。皆勤賞やがな。ところで賞品は何かな
あ？」

「僕の熱い抱擁」

「ゴメン、その気ない」

「何や、残念！」

山本さんは井口さんの真剣そうに謝る顔を見
て、思わず噴出しそうな氣になつた。井口さんもじ
つと目を見つめて笑いを嘯殺している。どちらとも
なく、フフと口の端に声のような空気が双方から
洩れた。二人は笑いながら軽く頭を下げていた。

井口さんとは病院で知り合つた。偶々坐つて、ス
ポーツ新聞を読んでいると、「タイガース、好きで

すか」と声をかけられた。この地方では野球はタイ
ガースなのだ。野球ファンは全てタイガースファン
と思つている節がある。山本さんも歌は六甲^{オロシ}風で、
風船を持つとやたら飛ばしたくなるくちだ。服の
色は黄色と黒色が何処かに入つていないと氣が済
まない。だから、親しくなるのに時間は掛からない。
タイガースやゴシップネタから始まつた話が、次第
に過去の仕事の事や家族の事を話すようになった。
タイガースがボールではなく、縁を運んで来たの
だ。

井口さんは既に七十歳を超えており、三年前に
奥さんと死別していた。「一人で暮らすつて、どん
な感じ何やろう、子供さんも出来なかつたしなあ」
山本さんはいつも会つたたびに、井口さんの明るさが
明確に理解出来なかつたし、自分にとつて奥さんの
居ない生活が想像出来なかつた。時折、視線を外
して、あらぬ方を見つめる井口さんの顔が、どこか
遠くにいる人を探しているようにも思えてならな

かった。

「井口さんもいつものリハビリ？」

「そうや。この忌々しい右足め！マンションの駐車場の入口チェーンに引つ掛り、こけて骨折とはなあ。ギブスが二ヶ月、その後、リハビリがもう半年以上になるもんなあ」

「頭を打たなかったのが、不幸中の幸いですよ。打つて、もし内出血でもしていたら大変ですもん」

「そらそうや。悪運が強いつて言いたいのかな？」

「そんな恐ろしいこと……言いたいけど」

「こら！怒るで。冗談はこれくらいにして、まあ、あなたと週に何回か会えるようになったのが、良かったつて事かなあ。半年ちよつとで、あなたとこんなになるとは思わなかったけどね。あの時、あなたがスポーツ新聞見てなかったら、あの日、どちらも通院してなかったら」

「会わなかったつて、いえ、いえ、それはありません。

井口さんとはお会いする運命やったのです」

「赤い糸で結ばれてたんや、きつと。あー、赤い糸は男と女やった。男同士は、青い糸や。それにしとこ」嬉しそうな顔を山本さんの方に向けて、悩み事など何も無いような明るい声で、井口さんは喋るのだった。

そんな話を二人がしていると、病院の職員が待合ロビーの大型テレビを付けた。小さな声が流れて、BGMと溶け合っている。ソファーに腰掛けている人も多くなってきた。

「テレビが付くという事は、八時半を回ったつて事やね。この病院の少ない欠点の一つ。テレビはいつもNHK。偶に見たいよ、8チャンネル。だけど、見れないこのテレビ。それなら不良とメーカーに、リコールすれば良いけれど、出来ない理由があるのです。それは何かと尋ねたら、値切ったから、値切ったから」

井口さんがいつも多少大きな声で、滑らかな節回しのような語り口を終えると、含み笑いで

頬を緩めた。

周りの人がこちらを向いて笑っている。山本さんは気がでない。冗談なのは分かっている。この率直な物言いが好きだ。思った事を直に口に出す。確かに大切な事なのだが、もう少し周りを見れば良いのにと思ってしまう。変な誤解を受けないとも限らない。これは井口さんの性格なのだ。「無理やろうな、治すのは。『三つ子の魂百まで』やもんな」山本さんはそつと心の中で呟いた。

「チャンネル、変えますか」

「ええよ。NHKで。今日はちよつと言ってみただけ。皆が、あれ見よ、これ見よ、言うたらテレビが幾つあつても、足らんもんね」

「よう、分かつてはりますやん」

「そら、分らないでか。早くから、座らせてもらつているだけで有難い。この時間、まだスーパ―は開いてない。行つて、うろうろでけへんもんな」

そう言えば、大型スーパ―へ買い物に行くと、売

り場を所在無く歩いている、自分と同じような年恰好の人を見た事が度々ある。山本さんはそれをした事がない。今までのところ別にする必要もなかった。「黙つて、一人で、何時間も歩いているのは疲れるやろうなあ」といつも思っていた。

「この病院は診察終つても、座つていられる。何と言つても、ジューズがただやもんなあ。珈琲もやつたら、言う事なしやけど」

「そうですね。他にないでしょう、こんな病院は。聞いた事ないですよのね」

「県立も、何とか医院も、終つたら、『はいさようなら』やもんなあ。まあ、座つてようとも思わんけども」

「ほんとですね」

「ヤマちゃん、なんで、ただの飲物置いたり豪華なソファ―を置いたりしているのか、分かる？」

「分かりませんわ。教えて下さい」

病院のあちこちで、井口さんは情報を仕入れて

いた。あの人なつこい、ざつくばらんな雰囲氣が人に警戒心を抱かせないのだろう。

「理事長が『井戸端サロンにして、患者様をオモテナシする』言うて、このロビーを作ったそうや。なんぼでも飲んで、話していつて下さいなんやて」「へえ！あのずんぐり・むつくりの理事長さんがね」「人は見掛によらないつて事や。姿かたちやない、要は中味なんや」

先程と打つて變つて、しみじみ言う井口さんの顔を眺めた。揉み手で医者が出て来たたら、患者もちよつと引くかもしれない。それでもパソコンの画面だけをを見て、病を診られるよりは良いようにも山本さんは思つた。「オモテナシねえ、ありかも……。こんな場所は少ないもんなあ」心の中で、またそんな言葉を思い浮かべていた。

「ヤマちゃん、『スーパールのうろうろ歩き』した事ないつて言うてたなあ。見た事はあるやろね」

「はい。ありますよ、何度も」

「男ばかりやろ、あれしてるの。女の人は見かけんやろ」

「そう言えば、そうですね」

「分かる、どうしてか？」

「家に居ると、五月蠅がられるからでしょ」

「ピンポン。定年して家に居ると、女の人が強くなるよね。稼いでいるのは私というのが通用しなくなる。五月蠅と言われれば、何処かに行かざるをえんもんね。それに、会社を辞めると、家の周りで、男は友人をよう作らへん。仕事の付き合いは出来ても、肩書きなしの付き合いをようせん。結局、一人でブラブラする人が多くなる。その点、女の人はずつと、近所付き合いをしているよね。つまり、亭主が汗水垂らして働いている時に、友達を作つていたつて事でしよう。用もないのに、スーパーへ行く事は無駄。それなら、友達と喋るつて事でしよう」

井口さんにしては珍しい長広舌を一気に終えた。多少憤慨しているようでもあり、仕方なさそう

なようでもある顔をしながら。

山本さんはちよつと考えて、確かにそうだと思つた。近所に友人は居なかつたが、積極的に友人を作ろうともしなかつた。友人を作るより、好きな事をしようと思つた。それは読書をする事であり、音楽を聴く事であつた。定年後三年程はこれで時間を潰す事が出来た。それが過ぎると、する事が思ひ付かなくなつて、テレビを見ている時間が多くなつた。見ているとテレビの前を離れるのが邪魔くさくなつて、何も考えずぼんやりといつまでも眺めているようになった。そうしていても奥さんは何も言わなかつた。言われていれば、山本さんも『スーパースキ』をしていたかもしれない。「あいつ、何も言わなかつたなあ。老人大学に行つたらとか、ボランティアに行つたらとか、そんな指図めいた事は……」何故か有難いような氣になつて、奥さんの顔を思い浮かべていた。

「ヤマちゃん、川村君を見んやろ、この頃。どうして

るか、知つてる？」

「いえ、知りませんが」

「川村君なあ、今、県立病院に入院してるんやわ」

「ええ、どうしてですか」

「それがなあ」

井口さんの声が多少湿り氣の帯びた調子にかわつた。川村さんは井口さんにこの病院で紹介してもらつた。井口さんが勤めていた会社の後輩で、確か、二つか三つ年下だつた。

「冗談で、『お前、頭、ワルイわ』つて言うたら、何を間違つたのか、県立病院で脳ドックを受けよつた。そしたら、即入院。腫瘍があつたんやて。まだ、小さいから手術したら大丈夫や、言われたんやて」

「何時から、入院してはるんですか」

「三週間ほど前からかなあ」

「そう言えば、姿を見んなあと思つてました。手術は終つたんですよ？」

「確か一週間前に、無事済んだと奥さんから聞いた

たよ。時間は相当掛かったみたいやけど。手術後の見舞いは未だ遠慮してるけどもね」

「そお、良かったですね。まあ、見舞いは何時でも行けますから」

「不幸中の幸いなんやろうな。あいつ、これで寿命が延びたよなあ。運、持つてるよ」

井口さんがしんみりとした口調になった。山本さんも川村さんの幸運を思った。もしドックに行かなかつたら、命はなかつたかもしれない。人はそんな偶然の中で暮らしている。だが、思いようによつては必然と言えるかもしれない。ドックに行く事が運命の差配だったのだ。山本さんは、穏やかで優しい瘦身の川村さんを思い浮かべていた。

「あれ、あそこに来るのは、浅川姉さんやないか。ほんま、目立つよなあ」

井口さんが入口を指差した。電動車椅子に乗り、濃い緑色の縁なしサングラスをかけ、茶色に染めた髪を内まきにした女性が見えた。ゆつくり車

椅子を所定の場所に置いて入口を入り、診察券を機械に通した。にっこり笑顔を浮かべながら、こちらの方に遣つて来る。

山本さんは井口さんから聞いた話を思い出していた。姉さんの旦那さんは病氣の後遺症で電動車椅子に乗っていたそうだ。これなら姉さんに負担を掛けなく済むからという理由で、旦那さんは結局亡くなつてしまう。悲しみの中で、姉さんは自分も電動車椅子に乗る事を決めたそうだ。外出時は常にこれに乗る。乗っていると、旦那さんを思い出して忘れる事がない。姉さんが忘れない限り、旦那さんは亡くなる事はない。いつも、姉さんの心の中に在り続けていると。

「浅川、ナウ！ ご両人、元気そうやね、久しぶり。海外旅行に行つてたんよ。言うどくけど、淡路島と違うで。れっきとした海外やで、フーランス。駅前の洋食屋と違うで」とサングラスを外しながら、ニコニコ笑顔の女性が一気に話終えた。

浅川姉さんは井口さんに紹介された。老人大
学で同級になつて、三年間の就学期間のうちに親
しくなつたそうだ。「女性に歳は聞けんから、はつき
り分からんけど、僕より年上やで」と井口さんか
ら聞かされていた。紹介されて直ぐに、山本さんは
姉さんの陽気なからつとした性格が好きになつた。
それから、三人が顔を合わすと、何やかや喋るよ
うになつていた。

「ヤーちゃん、腰、大丈夫か。わたしらより若いの
に、長い事通うなあ。ここは、居心地が良いつて
か？」

「また、そんな皮肉を。それはおいといて。行かつて
聞いてなかつたけど。フランスはどうでした？」

「花のパリに居続けて、美術館巡りをしてたわ」

「ほんどですか。確か、三・四日前に会つたような」

「弾丸ツアーやつたんよ」

井口さんが噴出しそんな顔をしながら、二人の
会話をじつと聞いている。

「真つ赤な嘘」

「またや。担がれた」

「ヤーちゃんは可愛いわ。いつも年寄りを立ててく
れる」

「姉さん、良いですか」

「何よ」

「その、ヤーちゃん、止めて貰えませんか。反社会的
集団の人、みたくないですか」

「山本さんやから、ヤーちゃんであえやないの。あんな
みたくないな華奢キャシャそうな人、誰がヤクザ屋さんと思
うかいな」

「それも、そうですね」

「ほんま、あんたは素直で可愛いわ」

「そうやろ、ヤマちゃん、可愛いやろ」と井口さんが
透かさず口を挟んだ。

「ハグしたいわ」

「ここは病院やし、人目もあるし、それに妻持ちで
すし。ご遠慮するという事で」

「あかんか？」

「あきません」

三人は顔を見合わせた。目が笑っている。噴出すのに時間は掛からない。まるで、周りに人がいないかのように、笑顔が弾けた。テレビの画面に8：50の数字が現れていた。

「カワさんの手術は無事に終つたね」

「そうですね、姉さん」

「良かったよね」としみじみと浅川姉さんが井口さんを見て言うのだった。

この待合ロビーで四人揃う事はそれほど多くはない。それなのに、もう何十年も付き合っているかのような気持ちになつている。相手の事が心配で仕方がない。聞いたところで、病気が良くなるものではない。それでも、聞かずにはいられない。山本さんは不思議でならなかった。「会う頻度ではなさそうだ。年齢や境遇でもなさそうだ。何でやろう。こんなに相手の事が気になつてしまうのは？」山本さ

んは解けない応用問題に出会つたように、心の中で答えを探していた。

「カワさん、運が良い。生き残つたもの。死ぬつて事は生きる事の終着駅。乗り換えもないし、乗り継ぎもない。もう、これでお終い。改札を出た瞬間に何もなくなつてしまう。だから、乗っている時は景色を見たり、乗っている他の人と喋つたり、心地よい振動に身を任せたり、精一杯せんとねえ。切符はこの駅までしかないんやから」

「そうやなあ。もう一度生きられたら、一回目はええかげん。二回目、勝負と思つうわな」

「井口君、実に賢い」

「今日は井口君ですか。いつものイーちゃんやないんですね」

「そう、ええ事言うもんなあ」

姉さんは笑顔を見せているが、目は笑っていないのを山本さんは感じていた。ふと、川村さんの穏やかな顔がぼんやりと浮かんできた。「一回きりの人

生だから、精一杯生きる。生きねばならない」山本さんがぶつぶつ反芻していると、姉さんが「一回きりやで！」と小さく呟いて、井口さんの方を向いた。「見舞いに行つたら」

「いつ、行きはります。一緒に行きますわ」

「行くんだつたら、『今でしょ』」

「ええ、今からですか」

井口さんが浅川姉さんの冗談が直ぐ理解できない風で、横に居る山本さんに顔を向けた。

「姉さんは、流行語が好きなんやから。今日、ここが終つたらつて事でしょ。私も付いて行きますわ」と山本さんが二人の方を見て笑うと、やつと気が付いてように井口さんも頷いた。「よつしや、行くで」姉さんが辺りに聞こえるような声を出した。

山本さんの耳に何かベルのような音が聞こえてくる。訝しげにその音の出处を手探りしていると、ひんやりしたガラス状の物に触れた。

「なんぼ、寝たんやろう」山本さんはベッドから起き上がって、目覚まし時計を見た。「止めて、また寝たつて事やね。この頃、ようこれがあるわ。それでとうとしてると、何か夢を見るんやなあ」カーテンを開けながら、誰に言うともなしに呟いた。朝の光が眩しい。堤を見ると、人の往来がもう疎らになつていた。「ちよつと、寝過ぎたかも。この歳やのに、よう寝るなあ。まあ、寝られるだけ、若いつて事かなあ」自嘲気味に言葉を漏らしながら、隣で寝ている奥さんを見た。未だすやすや眠っている。

「この頃、あの夢、よう見るなあ。いつも同じ病院で、同じ登場人物や。この歳になると、病院は出会いの場なんやろうか。別の所で会いたいけどなあ。そやけど、あんな人と会えるんやつたら、病院もええなあ。病院のハシゴでもするか。しかしなあ、あんな病院ないやろうなあ。あんな人達もないやろうなあ。探したら見つかるかなあ」と呟いて、無邪気に眠っている奥さんを眺めた。「この人もよう寝る

わ！」起こさぬように、そつと歩いて山本さんは寝
室のドアを開けた。

了



〔俳句〕

秋桜

彩さい

華はな

目覚めたらコスモス原の赤と白

風船と戯れるのは猫 秋桜

誘いは真つ赤なコスモス揺らす風

コスモス原 いつか裸足になつていた

コスモスの溜息 風が知つている

秋桜まだ諦められないでいる



昭和60年（1985年）の駅前例。山陽電車は地面。

アクトス写真館 今回は明石市議会だより第213号から転載しました。上は昭和60年、1985年です。下は平成3年1991年ですから、より前です。

真ん中をヨコに走っているのは山陽電車。

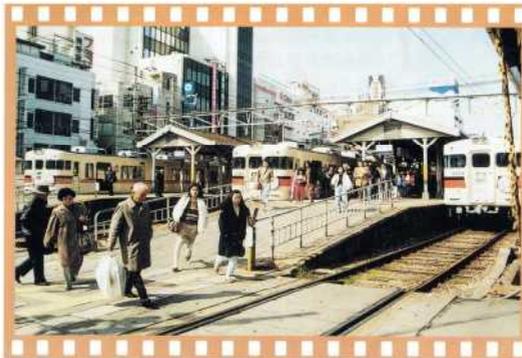
まあ、高架になった山陽を除けば、この位置からはあまり変化がない気がします。

アスピアも駅前ロータリーもない時代です。

手前のバス停付近は今は居酒屋グループの店舗があるようです。と思っていたら、この間見るとなにやら大きな建物ができていました。

明石市も大久保など一部を除けば全体として人口減少が続きます。三十万都市を目指しましたが足踏みをつづけます。神戸市などへの人口の流出は続くでしょう、日本の国全体がこれから勢いよく減っていくそうです。

29万少しという人口のまま、やがてガクンと減るのかも知れません。増えて欲しいものですがねえ。



平成3年の山陽電車明石駅。同年4月に立体交差。

◆ ショートショート

第二十号に寄せて

高阪博一

本棚にアクトスの創刊号から第十九号まで並んでいる。私は第三号から参加させてもらった。奥付を見ると、平成二十一年八月一日発行とあり、

六十二歳から始めた事になる。

この歳になると一年は早い。川の流れに乗った船のようだ。身体の衰えは当然の事だが、気持のそれが加わって、老いは容赦なく進んでいく。この流れに棹差していても、抗う方法は何かないかと考えた

時、私には書く事がピタリと嵌った。但し、作品の価値判断はあくとして。

私には第二十号に事寄せて質問が二つある。

その一：少なくとも第三十号までは続きますよ

ね、大西先生。

その二：そのうちお会い出来ますよね、

大西隆史君

大西先生、第二十号発行おめでとうございました。同人の皆様、ドンドン書いてアクトスを大きな樹に育て上げましょう。

了

◆ありがとうございます。最後にも記事があるのですが、ここいらでステップアップ、また「冒険しないといけないなあ」と思っています。組織・発行形態・編集機能・イベントと、またご相談したいと思います。大西隆史は私の甥ですが、なるほど私もアクトスの会合であつたことはありません。ま、なんとか我々の寿命のうちには一回くらい……。しかし彼岸になるかも知れませんねえ。(大西)

二十号に寄せて 弐

大西亥一郎

博一は、本棚に最新のアクトスを置いた。

もうずいぶんになる。

「124号か……」

第2回東京オリンピックも昔に終わり、リニアモーターカーは大阪から九州博多まで延びている。人口は八千二百万人になり、七十歳以上の高齢者は半数を超えた。百歳以上の女性は五百万人を数えている。

「あんな、こつちは人口増で、なかなかええとこに入れてもらえんのだや」

「亡者が多すぎて、走られへん」

「まだ、こないでええで」

仏壇から大西と柴田と塩見の声がした。

博一は頭をかきながら封筒を裏返した。

アクトス発行人、大西隆史の文字が笑っていた。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

20号に辿り着きました

大西亥一郎

会報にも書きました。会員のみなさまにも感慨深い方があるかと思えます。

大変ありがとうございます。誌面を借りて御礼申し上げると共に、振り返っておきたいと思えます。

「Actos2008」とあるように、2008年（平成二十年）にアクトスは始まりました。

私個人が三十代の頃から主に話話中心に創作を続けて来ました。早期退職して三年、「なんとか書くことを続けたい」と思いました。

しかし、発表の場がありません。童話は兎も角、小説・随筆などとなると、知り合いもありません。同人誌も、大きな有名なものは入れてくれないでしょう。また入会できたとしても、人数が多いと発表には限りがあります。

なにより、書こうという意志を持続する、刺激する場が欲しいわけです。

随筆や小説も神戸新聞や市の文芸祭などへの応募で、口幅つたいですが書ける自信はあります。「よし、では一人でも同人誌を出そう」と決めました。

自費で冊子を出す費用は、オンデマンド印刷が普及して最近急速に下がっています。これが始まったのは今から十三年前と言います。大変新しい技術です。

簡単に言うと自宅のプリンターみたいなものです。私たちはパソコンで文字を打ち、これをデジタル

で保存しています。必要なものは殆どインクジェットプリンターで打ち出します。

オンデマンドはデータを業者に送ると、インクではないですがトナーというインクの粉を使ってこれを印刷して本にしてくれます。

昔は、活字で『版』を作り、更にはアルミやゴム板のようなもので『版』を作り、インクを塗って紙に転写して印刷しました。

それがデジタルデータからいきなり紙に文字が打ち出せて、一冊からでも本にしてくれます。つまり『版』をつくらないのです。アマゾンなどと言う業者でもサービスが始まっているようです。

アクトスを立ち上げた当時はまだ余り目にしませんでした。

短歌や俳句という雑誌ならば、一人一、二頁あれば沢山の人が一冊に作品を載せられます。

が、散文は無理です。もし印刷業者に頼むと、一

人発表一頁について千円、冊子買い取りは、発表一頁一冊というようなことになりました。三十枚程の短編を十頁に載せると一万円、プラス発行冊子買い取り十冊となつて一万数千円かかります。これは発表負担金といって会費とは別です。年会費は三千円くらいですが、一年に一回、作品発表で二万円を超えることとなります。もしアクトスのように年四回となると……。

というわけで、「忘れた頃に書くのではなく」書き続けるためには費用を抑える必要があります。

また当初は仲間がいませんので、もし自分一人で発行するとなると数十頁のものでも業者印刷では費用が手に負えません。

では、自分で作るか、と始めたのが今のアクトスです。自分で打ち込んで自宅のパソコンで編集し、自宅のプリンターで打ち出し、製本する。

何のことはない、手作りオンデマンドです。面倒ですが、利点は、費用が安いこと。

業者のオンデマンドは、通常デジタルデータの完成稿を送ります。手書きから文字を入れる事を頼むと一文字一円とか一頁千円とかいう値段になります。これに編集・レイアウト・校正費用が発生し、更に印刷・製本・送料などとなります。表紙のカラー印刷は別料金です。

そこでまずデータは原則デジタルのみとします。それをワープロソフトに流し込んでレイアウトします。プロの編集ソフトではないので、細かいところは目をつむります。原則、著者原稿は手を入れなくていい完成稿だと言う前提です。

製本も手作業です。ただ、家庭用のプリンターはインク代が凄いです。ネットで安いものを探して購入してもすぐになくなります。勿論良いことが

あります。オンデマンドではまず高額の費用を掛けないと無理なカラー印刷が簡単なことです。前号や今号の表紙をご覧下さい。

仲間をどうするか、ということ、「いなければ一人でもやる」と決めて、友達、知人に声を掛けました。今から考えると厚かましいお願いをしたものです。「よくまあ恥ずかしいことをしたなあ」と思います。無我夢中だったのでしよう。こたえて下さった皆さん済みません。ありがとうございました。

中学勤務時代の仲間、市役所勤務時代の知り合い、童話の読み聞かせの仲間、私の講演会の受講生、大学時代からの友人、肉親というわけです。

創刊号は目次に「永井組若芽」、「彩華」、「小川悦子」、「柴小路秀麿」の名前があります。後の、大西生一朗、石川柳歌、明達光輝というのは、総て私の筆名ですから5人です。もちろん立ち上げの

時に、アクトスには書かないけれど仲間となつて下さった方もおられます。

「三号雑誌にはしないぞ」

とだけは思っていました。この手の同人誌は、三号くらいで続かなくなつてオシマイと言うケースが多いのです。

幸い、マスコミの報道を見て、あるいは友達を誘われて、その後、新しい仲間が入会してくれました。現在おられる高阪博一、小野村新、大西隆史、大西裕子、松田政雄、豊川宣行、更には一時在籍された伊藤雪山、バーラ・カッシー・高嶋成子・高丸さんなどです。(筆名優先で表記しています。)

例会も月一回で開始し、途中から奇数月になったものの四十五回になりました。会場はサンピア・衣川コミセン・現在地と変わりました。

当初二十号まではと内心思い、「いや最低十号までは」と弱気にもなりました。が、幸い二十号に

到達できました。

十号までは既に入っていますが、今号までも国会図書館には納本したいと思えます。

さて、オンデマンドが急速に普及しました。この間調べていましたら、印刷製本だけなら四、五万で百頁の冊子が五十部くらい出せそうです。

データは今まで通りネットで頂き、編集、レイアウトして業者に渡せば、印刷製本代等だけです。但し、白黒(モノクロ)印刷です。文字ばかりがづらづらと並ぶことになります。それは一回の発行に今までの倍以上の良質の原稿量が必要と言う事も意味しています。

まあ、短歌や俳句、詩などもレイアウトはこちらでしますから、びつしりと言う状況ではありません。「考えてみようかな」と思っています。急ぐ必要はありませんので、またご意見をお聞きしたいと思います。メールでも掲示板でも自由にご意見を

下さい。

印刷形態もさることながら、さて、これからどうすると誰かが聞きます。

まずは二十一号は出さねばなりません。この分までの会費をいただいています。その後は、印刷形態の話をするからには続ける意志はあるのですが、「ふむ……」と今悩んでいるところです。

組織については、一時、会費などのお世話を高阪さんにお願ひしたこともあるのです。結局、十数名では却つて処理がややこしくなりました。

でもまあ、小さくても組織は組織、これも遠慮なくご意見をいただければと思います。

個人的には、「まず、つづける」そして「なんかはじめる」という気持ちです。

みなさんのご理解とご協力（JRみたいですが）を感謝しつつでは、とりあえず二十一号の原稿をお待ちします。

10号から20号までの総目次

10号

発行 2011年（平成23年）／5／1

鴨川閑話……柴小路秀麿	1
詩4編……大西裕子・令月	6
松庵二丁目……小野村新	11
10号までのあゆみ	19
水仙句と故郷……松田政雄	25
「Typhoon 127号……足達光輝	28
りーくんと月……ゆきんこ	36
好きな匂い……水田竜子	38
我が小さき孫・子らへ 辞典を引くということ……伊藤雪	39
山	43
ゼンマイ仕掛けのタイム・マシーン……高阪博一	43

俳句：夏子 53
 なにしてる：大西亥一郎 55
 ー競演 第七回 だんー 男同士「小川悦子」ダン、ダン、ダン「高阪博一」ほらふき男爵の冒険「大西亥一郎」 56
 総目次・編集室から 72

11号 発行 2011年(平成23年)／8／1

忘れ難きスケルトネマの思い出：伊藤雪山 1
 寄稿 撫子だより：吉田瑞代 6
 運命：小川悦子 9
 詩2編 サンダーバード・梅雨：大西隆史 17
 乾杯：彩 華 20
 自句自解：彩 華 21
 ちよつと雨宿り：高阪博一 23
 短歌八首：小野村新 31
 こともトイレ異聞：大西亥一郎 32
 配句：大西亥一郎 39
 生きる音：今月 40

ー競演 第八回 てんー
 テンに帰れぬかぐや姫：高阪博一 43
 転：永井組若芽 50
 「金閣寺」：柴小路秀磨 53
 編集室から 60

12号 発行 2011年(平成23年)／11／1

娘の結婚 水田竜子 1
 俳句 松田政雄 3
 「小説」 変身 小野村 新 5
 骨人の夏 柴小路秀磨 11
 「詩」 大人 大西隆史 21
 「俳句」 春の河 夏子 24
 400字くらいコーナー
 交信 明花 26
 ひとつだけ 今月 28
 東京命数取引所 大西隆史 30
 傷み 大西亥一郎 31
 若き日も今も出会い大切に 小川悦子 32

朝 足達光輝	33
風船売り はなのはなこ	35
競演 第九回 タイ	
大変なお話 大西亥一郎	39
昭和タイムマシン 騒動記 永井組若芽	52
編集室から	56

13号 発行 2012年(平成24年) / 2 / 1

カオルと太郎 大西亥一郎	1
母さんのお年玉 明花	13
続父 小川悦子	15
偽りの歴史書 参 早蕨 椿	18
ホンモノ 大西隆史	29
肝試し 小野村 新	32
母 高丸	40
アクトス写真館	45
みんながキミを愛してる 大西亥一郎	46
◆400字くらいコーナー◆	
増設いたします 大西隆史	54

欠食児 大西亥一郎	58
或る日の日記から 高阪博一	61
お母さん 大西亥一郎	63
編集室から	68

14号 発行 2012年(平成24年) / 5 / 1

おかいもの 大西亥一郎	1
塔 柴小路秀磨	23
窓辺 高阪博一	29
一陣の風 大西隆史	34
生きる 大西隆史	36
春愁 夏 子	39
前田純孝賞 学生短歌コンクール 大西隆史	41
儂い花に理想を乗せて 大西裕子	42
アクトス写真館	46
孫という名の宝物 小川悦子	47
賞味期限 高阪博一	49
あなたへ 小川悦子	51
会員名簿	53

編集室から
|
55

15号 発行 2011年(平成24年) / 8 / 1

梶井基次郎はハンサムである 小野村 新 | 1

鴨川閑話 II 胃弱亭 骨人 | 8

花いろいろ 高阪博一 | 14

慟哭 水田竜子 | 22

科学と思考 大西隆史 | 28

白蝶の群れ 彩 華 | 31

生ゴミ男 大西亥一郎 | 32

アクトス写真真館 | 55

シヨートシヨート ことぶき大学 高阪博一 | 56

ご紹介 原稿応募先 | 58

編集室から | 67

16号 発行 2012年(平成24年) / 11 / 1

夏の終わりに 骨弱亭 骨人 | 1

アピーロード 小野村 新 | 4

龍之介の皺は深い 高阪博一 | 11

二足のわらじ 明花 | 22

畑 大西 亥一郎 | 25

仙人掌 瓜生 八頼子 | 36

あこがれのカラオケ教室 水田 竜子 | 38

アクトス写真真館 | 42

鏡と写真 高阪 博一 | 43

おじぞうさま 大西 亥一郎 | 45

編集室から | 51

17号 発行 2013年(平成25年) / 2 / 1

ねこまんまの時代 大西亥一郎 | 1

なまくらにグツパイ 魅華 | 20

十一月の紅い花 明花 | 22

捨てられないメモ 高阪博一 | 26

「俳句」冬薔薇 彩 華 | 29

嘘 令月 | 30

地球は青かった | 40

或る夜の電話 高阪博一 | 43

詩三編	大西隆史	61
「Kの死」	胃弱亭骨人	65
門本君	小野村新	68
ゴルフ道具	高阪博一	75
編集室から		77

18号 発行 2013年(平成25年) / 5 / 1

春の憂鬱	胃弱亭骨人	1
薄紫	奮闘記その三 高阪博一	3
門本君	小野村新 (後編)	16
病気になつて	魅華	29
卒園に向けて	ゆきんこ	33
俳句	花吹雪・他 彩華	36
詩	しんだ か… 大西亥一郎	38
アクトス写真館		46
シヨートシヨート		
原稿用紙	130 高阪博一	47
なにしてる	大西亥一郎	48
編集室から		51

19号 発行 2013年(平成25年) / 8 / 1

日記	小野村新	1
一年生になつて	ゆきんこ	9
大観橋	胃弱亭骨人	15
妄想女子	明花	19
詩	三編 大西隆史	24
江戸の敵は長崎で討つ	高阪博一	29
怪談図書館	大西亥一郎	44
シヨートシヨート		
運転免許	高阪博一	54
なにしてる	大西亥一郎	56
編集室から		60

20号 発行 2013年(平成25年) / 11 / 1

眼	大西亥一郎	1
偽りの歴史書	四 早蕨 椿	12
長生きの秘訣	胃弱亭 骨人	25

人間ドック	小野村	新	28
祈り	魅華		35
ビューティフル・ドリーマー	高阪博一		41
「俳句」秋桜	彩華		55
アクトス写真館			56
シヨートシヨート二編	高阪博一・大西亥一郎		57
20号に辿り着きました	大西亥一郎		59
総目次	(10号から20号まで)		63
編集室から			70

臨時増刊号

『エスプラネード』「小説」大西亥一郎著

第五卷第二号 通算18号

発行2013年(平成25年)／3／1

『ねえ おしゃかさま』「第一詩集」大西亥一郎著

第五卷第四号 通算20号

発行2013年(平成25年)／5／5

『ねえ おじいさん』「第二詩集」大西亥一郎著

第五卷第五号 通算21号

発行2013年(平成25年)／6／21

『まあ 生きようか』「第三詩集」大西亥一郎著

第五卷第七号 通算23号

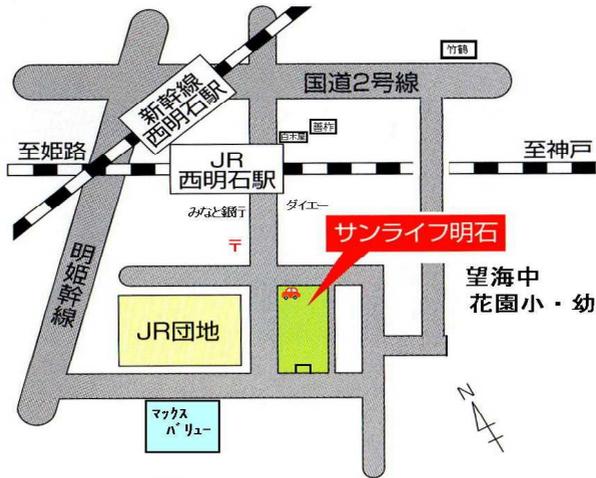
発行2013年(平成25年)／8／27

別冊

『エスプラネードをこう読む』大西亥一郎編著

発行2013年(平成25年)／5／1





◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

- ◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合は手帖などにお控え下さい。
- 出欠のご連絡は不要です。

編集室から

◆次号(第21号)の原稿締め切りは12月末必着です。

■11月例会は16日(土)です。終了後、20号記念の懇親会があります。

◆来年1月例会は18(土)です。

◆来年三月例会のみ、第3土曜でなく、第4土曜日の22日になります。ご注意ください。

◆HPに、20号までを、PDFファイルで掲載しました。

URL: <http://actos2008.o.oo7.jp/>
(ネット検索の窓から「文芸アクトス」といれて探されても出てきます。)

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ②〒住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業・電話・メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
〒673-0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3200円です。**

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

- ◆ アクトスに参加下さい。携帯メールかインターネットがあれば、海外からでも参加できます。
- ◆ 例会に参加できなくても、HP・掲示板などで状況を知ること可能です。
- ◆ 少しずつ書きためて人生の足跡を刻んで下さい。
- ◆ ペンネームで発表できます。

 加入方法は前ページをご覧ください。

アクトスHP

URL : <http://actos2008.o.oo7.jp/>

アクトス 第20号

第5巻第8号・通巻第24号

発行 平成二十五年十一月一日

編集 大西亥一郎

発行所

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-9222-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）800円